

## 2022年度活動報告

### 九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 春の例会

九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 春の例会は、第94回九州昆虫セミナーとの合同で、2022年4月24日（日）にオンラインにて開催された。以下の2題の講演が行われ、参加者は40名であった。

1. キノコバエに送粉される植物の隠された多様性と新しい送粉シンドローム  
望月 昂（東京大院・理・植物園）
2. トノサマバッタにおける RNA 干渉から昆虫食まで  
管原亮平（弘前大・農生）

### 九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 夏の例会

九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 夏の例会は、2022年10月1日（土）にオンラインにて開催された。以下の題で講演が行われ、参加者は48名であった。

1. 昆虫の多様性と進化がわかる図鑑を作る  
丸山宗利（九州大・博）
2. 特定外来生物ツマアカスズメバチの福岡への侵入  
上野高敏（九州大・農）

### 九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 秋の例会

九州・沖縄昆虫研究会 2022年度 秋の例会は、第95回九州昆虫セミナーとの合同で、2022年11月19日（土）にオンラインにて開催された。以下の2題の講演が行われ、参加者は42名であった。

1. 過変態昆虫マメハンミョウの環境適応能力  
寺尾美里（南九州大・フィールド教育センター）
2. 宿主昆虫の累代飼育過程で生じた共生細菌ボルバキアの細胞質不和合遺伝子の欠失  
吉田一貴（佐賀大・農）

## 九州・沖縄昆虫研究会 2022 年度大会

九州・沖縄昆虫研究会 2022 年度大会は、日本鱗翅学会九州支部と合同で、2022 年 12 月 10 日（土）にオンラインにて開催された。以下の 1 題の特別講演と 7 題の一般講演が行われ、参加者は 66 名であった。

### 特別講演

#### 小笠原諸島における植物-昆虫相互作用の解明

川北 篤（東京大院・理・植物園）

東京大学理学系研究科附属植物園では、1980 年代より小笠原諸島の希少野生植物保全に積極的に取り組んでいる。しかし、小笠原諸島の植物と昆虫の相互作用は多くのことが未解明であり、保全を考える上でもその理解が欠かせない。例えば、希少な固有植物種がどのような昆虫に送粉されているかがほとんど分かっておらず、その解明は、小笠原諸島で起きた独自の花の進化の理解に不可欠である。また、潜葉性の種をはじめとする微小蛾類には未解明の高い多様性があり、これらは海洋島における植物-昆虫相互作用の多様化を探る優れたモデルである。講演では、小笠原諸島における植物-昆虫相互作用の解明を目指して私たちが現在取り組んでいるプロジェクトとその成果について紹介する。

### 一般講演

#### 1. サイカブトの成長に与える餌の効果に関する基礎研究

○板羽菜楠（九州大・農）・石東広地（九州大院・生資環）・  
紙谷聡志（九州大院・農）

近年、SDGs（持続可能な開発目標）達成のために昆虫食が注目されている。現在、最も商業化されている食用昆虫の一つであるコオロギは、乾燥した食品廃棄物を餌としている。しかしながら、腐植物資源は未利用資源のままである。そこで、本研究では、西日本が抱える放置竹林問題にも触れつつ竹を用いてサイカブトを飼育しようと計画した。本種の幼虫は、海外ではヤシの幹などの腐朽の程度の浅い腐朽物を餌とすることが知られている（Kamarudin et al. 2001）。一方、本種に竹を与えた場合の 3 齢中期までの成長に関しては、廃菌床との混合割合に応じて変化することが報告されている（石東ら 2021）。しかしながら、食味の観点から蛹が最も優れているので、蛹までの成長と餌の関係を明らかにする必要がある。本研究では竹と廃菌床の混合割合が、幼虫の成長および蛹の重さに与える影響をあきらかにすることを目的とする。竹と廃菌床の混合割合が 50:50, 25:75, 0:100 の場合において、体重を 1 週間ごとに測定し、最大体重と発育速度で検定を行った。餌の違いがサイカブト幼虫に与えた成長効果について報告する。

#### 2. 日本産 *Lycosa* 属（コモリグモ科）の分類学的研究

○信太理央（九州大・農）・広渡俊哉（九州大院・農）

コモリグモ科は 10 亜科、127 属、2500 種前後の種から構成されるクモ目の中で最も種多様性の高い分類群の一つである。*Lycosa* 属は *Lycosinae* 亜科に属する本科のタイプ属であり汎世界的に分布する。本属は国内では 7 種が記録されているが、分類学的研究は Tanaka (1990) 以降進んでおらず、これらの種に関しても属および、いくつかの種に分類学的な問

題を抱えている。

本研究では野外調査で得られた標本および博物館・個人コレクションから借用した標本を用いて形態観察を行い、国内における *Lycosa* 属の種およびその近縁種の分類学的再検討を行った。この際、特に原記載以降記録の乏しい種に関してはタイプ標本の観察を含めた詳細な検討を行った。結果として、国内に未記載種の存在は確認されなかったが、原記載以降記録の乏しい *L. matusitai*, *L. pia* の2既知種に関する新たな知見を得るとともに、野外調査の過程で1日本新記録種が発見された。本発表では上記の3種の検討結果をのべる。

### 3. ウロコアリ雄に見られる形態の変異について (ハチ目アリ科)

○青山拓実 (九州大・農) ・三田敏治 (九州大院・農) ・  
細石真吾 (九州大・熱研セ)

ウロコアリ *Strumigenys lewisi* Cameron, 1886 は東アジアから東南アジアにかけて分布する体長2mm程度のアリで、日本でも最も普通に見られる土壌性のアリの一種である。本種のワーカーや女王が褐色であるのに対し、雄は黒色で、大きな複眼や長い鞭状の触角などの特徴を有している。先行研究により本種雄の前翅翅脈には変異が確認されており、Rs, M+Cu, Cu等の翅脈が個体によって着色された線として見える場合とそうでない場合があることが示されている (Yoshimura & Onoyama, 2007)。雄アリの翅脈に関する種内多型は先行研究に乏しいため、本種の翅脈とその変異に関わる他の形態的特徴の有無を明らかにする目的で、国内で得られた雄個体を用いてその形態を詳細に検討した。結果、観察した個体はすべて翅脈の明瞭な個体と翅脈の見えにくい個体のいずれかに分けることができた。また、翅脈の特徴により分けられた2群間の形態を比較したところ、前伸腹節の隆起状態に違いが見られた他、形態計測の結果、前胸背板の幅にも有意な差が認められた。以上のことからウロコアリオスに見られる翅脈の変異は2型であることが示唆された。

### 4. サカキを加害するサカキブチヒメヨコバイの発生生態 (予報)

○森 理乃 (佐賀大・農) ・森口辰也 (佐賀林試) ・徳田 誠 (佐賀大・農)

サカキブチヒメヨコバイ *Stictotettix cleyarae* (以後、本種) は2019年に新属新種として記載された昆虫であり、サカキの葉を吸汁し白斑を残す害虫である。白斑によりサカキの商品価値が低下するため有効な防除対策が求められているものの、本種の生態には未解明な点が多い。本研究では、本種の生活史や発育特性を明らかにするため、定期的な捕獲調査および室内飼育実験を行っている。捕獲調査では佐賀県三養基郡基山町のサカキ林内に黄色粘着板を設置し、2週間ごとに回収して個体数や性別、体色などを確認した。また、捕獲個体を解剖して卵巣内の成熟卵を計数した。飼育実験では、同地で採集した幼虫や成虫を20°C 16L:8Dで維持して観察した。2022年4~11月の調査では、5, 6~7, 8, 10~11月に捕獲個体数のピークが見られ、捕獲個体の性比は有意にオスに偏った。オスの方が高い移動性を持つなどの理由から、より多く粘着板で捕獲された可能性がある。飼育実験により、成虫は羽化後間もない時期に赤色を呈することが確認された。赤色個体の割合は5月と8月に高まったことから、この時期に新成虫が出現していると見られた。

## 5. ベニツチカメムシの雌親由来の粘液が幼虫発育に及ぼす影響

○栗田桃萌・奥園元晴・徳田 誠（佐賀大・農）

多くの植食性カメムシ類では、消化管内の共生細菌が必須栄養素の合成などを担っていることが知られている。しかし、発育段階に応じた共生細菌の機能については未解明な点が多い。ベニツチカメムシは羽化後 1~2 年間の生殖休眠中に摂餌を行わない。これは胃盲嚢内に存在している“*Candidatus Benitsuchiphilus tojoi*”がウリカーゼなどの酵素を用いて、代謝産物である尿酸をアミノ酸へ再合成しているためであると示唆されている。また、この細菌は雌親が卵塊に塗布する粘液を孵化幼虫が摂取することにより垂直伝播される。粘液を除去して飼育した幼虫では、成虫段階での体サイズの低下や体色異常が生じることが知られている。本研究では、粘液自体と粘液内の共生細菌が幼虫の発育に及ぼす影響を区別するため、雌親に抗生物質を経口摂取させ、粘液から共生細菌を排除した処理区を設け、対照区、共生細菌除去区、粘液除去区の 3 処理区間で死亡率の比較を行った。その結果、粘液除去区では若齢幼虫の死亡率が高いのに対し、共生細菌除去区では老齢幼虫の死亡率が高かった。したがって、粘液の成分が発育段階初期での生存に寄与している可能性が考えられた。

## 6. マレーズトラップによるタマバエ類の捕獲消長：佐賀県の森林と開放地での比較（予報）

○日南 瑤・古川晶啓・Ayman K. Elsayed・徳田 誠（佐賀大・農）

昆虫は陸上生態系で最も適応放散した分類群である。近年の研究から、中でもハエ目タマバエ科の最も種多様性が高いことが指摘されており、その多様性を理解することは昆虫の適応放散を考える上で重要である。しかしながら、タマバエ科の現在の既知種数は世界で約 7000 種であり、未知の膨大な多様性が存在していることが示唆される。演者らは現在、タマバエ類の多様性を明らかにする目的で、様々な方法により網羅的な採集と同定を進めている。本講演では、佐賀県内の森林 2 地点と開放地 2 地点で 2022 年 5~7 月にマレーズトラップを用いて採集されたタマバエの予備的な結果を紹介する。亜科レベルで同定した結果、腐食性の亜科では 5 月に *Lestremiinae* や *Micromyiinae* が多く確認され、6~7 月に *Porricondyliinae* が増加した。これらの中には、これまで国内の自然植生から成虫の採集記録がない幼生生殖性の *Leptosyna* 属が含まれていた。*Cecidomyiinae* は 6~7 月にとくに森林において捕獲数が大きく増加した。これらのうちの一部は捕食性、残りは植食性の種であると考えられた。

## 7. ヒヨドリジョウゴキバガ幼虫形態について（鱗翅目、キバガ科）

○酒井大輔・津田勝男・坂巻祥孝（鹿児島大・農）

ヒヨドリジョウゴキバガ *Ergasiola ergasima* は、キバガ科 *Gnorimoschemini* 族に属する小型の蛾で、ナス科植物を食害する。日本ではナス科植物を食害する *Gnorimoschemini* 族として、ジャガイモキバガ *Phthorimaea operculella* が知られていたが、昨年新たにトマトキバガ *Tuta absoluta* の侵入が確認された。トマトキバガの国内発生域が拡大する中で、圃場のナス科植物上で見られる可能性のあるこれら 3 種幼虫の識別が必要になると考えられるが、ヒヨドリジョウゴキバガは若齢幼虫の形態が明らかになっておらず、3 種の識別方法が確立されていない。本研究では、ヒヨドリジョウゴキバガの幼虫形態を明らかにすることで、3 種

の識別において有用な前胸背板と刺毛配列の形質差異を発見することができた。特に刺毛配列の形質差異については、若齢幼虫の識別にも用いることができることが明らかになった。本研究は農研機構生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業（課題番号04019C2）」の支援を受けて行った。

九州・沖縄昆虫研究会 2022年度会計報告（2022年12月9日締）

収入		
	前年度（2021年12月7日締）繰越分	396,300円
	合 計	396,300円
支出		
	（なし）	0円
	合 計	0円
差引残高		396,300円

2022年12月9日  
九州・沖縄昆虫研究会 会計幹事 紙谷聡志

## - 原 著 -

## 目次

6 2 0	(Hem.: Tingidae) チシャノキグンバイの本州と奄美群島からの初記録	相馬 純	919
6 2 1	(Hem.: Tingidae) ルイスグンバイの九州からの 106 年ぶりの再発見	相馬 純	920
6 2 2	(Hem.: Tingidae) アミメグンバイの九州からの 61 年ぶりの再発見	相馬 純・井上翔太・辻 尚道・橋爪拓斗	920
6 2 3	(Hem.: Tingidae) エゾナガグンバイの佐賀県からの初記録	相馬 純・久末 遊	922
6 2 4	(Hem.: Tingidae) <i>Baeochila horvathi</i> の福岡県からの 72 年ぶりの再発見	相馬 純	922
6 2 5	(Hem.: Tingidae) スコットグンバイの宮古列島からの初記録	相馬 純	923
6 2 6	(Hem.: Tingidae) アワダチソウグンバイの先島諸島への移入	相馬 純	924
6 2 7	(Hem.: Miridae) <i>Stethoconus takaii</i> の九州と奄美群島からの初記録	相馬 純	925
6 2 8	(Pha.: Heteropterygidae) 沖縄諸島平安座島におけるコブナナフシの採集記録	小浜継雄・吉武 啓	927
6 2 9	(Lep.: Tortricidae) 九州初記録のハマキガ亜科 2 種	鈴木信也・佐々木公隆	927
6 3 0	(Hym. Proctotrupidae) 福岡県英彦山のマレーゼトラップで得られたシリボソクロバチ科	阿部純大	929
6 3 1	(Lep.: Nymphalidae) 大阪市立自然史博物館所蔵の福岡県産サトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモン	長田庸平	931
6 3 2	(Lep.: Arctiidae) ムラマツカノコを沖縄諸島屋我地島で採集	小浜継雄	933
6 3 3	(Lep.: Gelechiidae) チャマダラノコメキバガの九州からの記録	外村俊輔	934
6 3 4	(Lep.: Batrachedridae) 九州初記録のスゴモリキバガ類	外村俊輔・屋宜禎央	935
6 3 5	(Lep.: Macroheterocera) 福岡県における大型鱗翅類 10 種の記録	屋宜禎央	937

- 6 3 6 (Col.: Curculionidae) 沖永良部島初記録のクチカクシゾウムシ亜科甲虫……………  
……………今田舜介・辻 尚道 940
- 6 3 7 (Hemi. Pentatomidae) 熊本県におけるヒラタトガリカメムシの記録……………  
……………上原友太郎 940
- 6 3 8 (Meco.: Bittacidae) 福岡県におけるカゴシマガガンボモドキの記録……………  
……………下岡敏士・女澤典典 942
- 6 3 9 (Lep.: Ditrysia) 冬季にスギ (ヒノキ科) のピーティングによって得られた小蛾類……  
……………後藤聖士郎 943
- 6 4 0 (Lep. Glyphipterigidae) *Chrysorthenches muraseae* の九州からの記録……………  
……………後藤聖士郎・屋宜禎央 946
- 6 4 1 (Lep.: Plutellidae) クサビモンコガの九州からの記録……………  
……………屋宜禎央 947
- 6 4 2 (Col.: Curculionidae) 初記録種を含むトカラ列島悪石島産ゾウムシ科甲虫目録……………  
……………今田舜介・辻 尚道 948
- 6 4 3 (Col.: Curculionidae) ザウターカレキゾウムシのトカラ列島における追加記録 および  
奄美諸島における分布記録……………辻 尚道・今田舜介 951
- 6 4 4 (Col.: Staphylinidae) 八重山諸島におけるウシオハネカクシ属 2 種の記録……………  
……………橋爪拓斗・野崎 翼・今田舜介 953
- 6 4 5 (Col.: Staphylinidae) 長崎県五島列島初記録のハネカクシ科甲虫 8 種……………  
……………橋爪拓斗・佐藤勇哉・丸山宗利 953
- 6 4 6 (Dip.: Cecidomyiidae) スダジイタマバエの奄美大島と徳之島における採集記録……………  
……………小高信彦・宗 祥史・Ayman Khamis Elsayed・徳田 誠 956
- 6 4 7 (Phas.: Varia) ヤマトアシナガアリ及びアズマオオズアリの巣から発見されたナナフシ  
卵……………勝部菜摘・久末 遊・西谷光平・橋爪拓斗・三田敏治 959
- 6 4 8 (Phas.: Varia) 九州大学伊都キャンパスでみられるナナフシ類……………  
……………勝部菜摘・久末 遊・三田敏治 962

620 (Hem.: Tingidae) チシャノキグンバイの本州と奄美群島からの初記録

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

日本, 台湾, フィリピンに分布するチシャノキグンバイ *Dictyla evidens* (Drake, 1923) (カメムシ目: グンバイムシ科) は, 国内では四国, 九州, 五島列島 (福江島), 沖縄諸島 (沖縄本島), 八重山列島 (石垣島) から知られ, チシャノキ *Ehretia acuminata* R.Br. (ムラサキ科) に寄生する (石川ら, 2012; 日本昆虫目録編集委員会, 2016) .

著者 (J. Souma) は, 山口県本土部と奄美大島で本種を採集したので, 両地域ならびに, 本州および奄美群島初記録としてここに報告する. 検視標本はすべて著者が保管している.

[検視標本]

6♂2♀ (図 1, 3), 山口県下関市石神町 (Yamaguchi-ken, Shimonoseki-shi, Ishigami-cho), 24. IX. 2022; 1♂4♀ (図 2), 琉球奄美群島奄美大島奄美市住用町石原 (the Ryukyus, Amami Isls., Amami-Oshima Is., Amami-shi, Sumiyo-cho, Ishihara), 2. V. 2022.

上記の13個体はチシャノキの葉 (図 4, 5) から採集された.

山口県は現在のところチシャノキグンバイの最も北の産地である.

[引用文献]

石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (編) (2012) 日本原色カメムシ図鑑—陸生カメムシ類 Terrestrial Heteropterans— 第3巻. 576 pp. 全国農村教育協会, 東京.

日本昆虫目録編集委員会 (編) (2016) 日本昆虫目録 第4巻 準新翅類. xxxiv + 630 pp. 日本昆虫学会・權歌書房, 福岡.

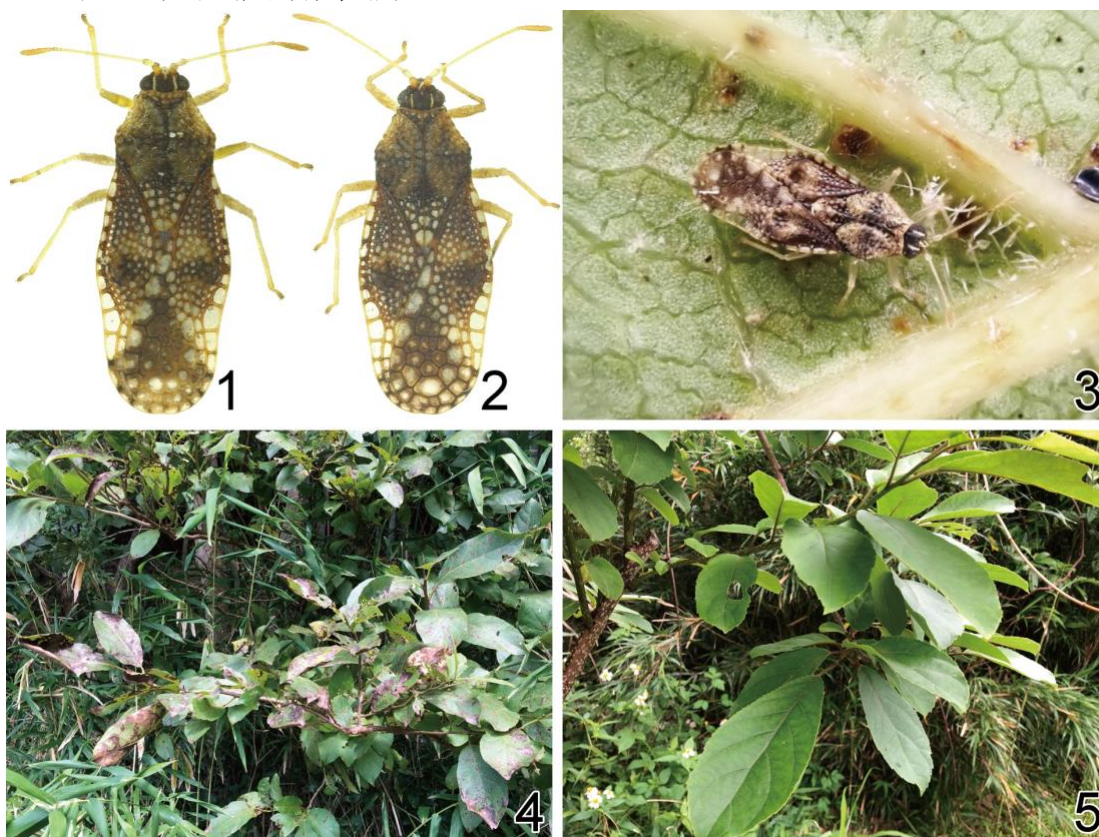


図 1-5. 1-3, チシャノキグンバイ, ♀ (1, 3, 山口県; 2, 奄美大島); 4, 5, 寄主植物チシャノキ (4, 山口県; 5, 奄美大島) .



## 6 2 1 (Hem.: Tingidae) ルイスグンバイの九州からの 106 年ぶりの再発見

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

東アジアに広く分布するルイスグンバイ *Limnstatua lewisi* (Scott, 1880) (カメムシ目: グンバイムシ科) は, 国内では北海道, 本州, 九州, 対馬から知られ, ウナギツカミ *Persicaria sagittata* (L.) H.Gross (タデ科) とボタンヅル *Clematis apiifolia* DC. var. *apiifolia* (キンポウゲ科) から得られる (Souma & Ishikawa, 2022). ボタンヅルグンバイの和名で知られる *Cysteochila vota* Drake, 1948 は本種の新参異名である (日本昆虫目録編集委員会, 2016; Souma & Ishikawa, 2022). 九州における本種の記録は少なく, 福岡県北九州市門司区 (1916 年 7 月 19 日採集) の 1 例があるのみである (Drake, 1948).

著者 (J. Souma) は, 2022 年 6 月 9 日に福岡県で本種を採集したので, 九州および同県における 106 年ぶりの再発見としてここに報告する. 検視標本はすべて著者が保管している.

## [検視標本]

1♂2♀ (図 1), 福岡県糸島市雷山 (Fukuoka-ken, Itoshima-shi, Mt. Raizan), 9. VI. 2022.

上記の 3 個体はイヌタデ属の 1 種 *Persicaria* sp. (図 2) のビーティングにより採集された.

## [引用文献]

Drake, C.J. (1948) Some Tingidae (Hemiptera) from China, Japan and India. *Notes d'Entomologie Chinoise*, **12**(1): 1–9.

日本昆虫目録編集委員会 (編) (2016) 日本昆虫目録 第 4 巻 準新翅類. xxxiv + 630 pp. 日本昆虫学会・権歌書房, 福岡.

Souma, J. & Ishikawa, T. (2022) Taxonomic review of the tingingine genera *Cysteochila*, *Hurdchila*, *Physatocheila*, and *Xynotingis* from Japan, with description of a new genus (Hemiptera: Heteroptera: Tingidae). *Zootaxa*, **5150**(1): 1–42.



図 1, 2. 1, 福岡県産ルイスグンバイ, ♀; 2, イヌタデ属の 1 種.

## 6 2 2 (Hem.: Tingidae) アミメグンバイの九州からの 61 年ぶりの再発見

相馬 純・井上翔太・辻 尚道・橋爪拓斗 (九大院・生資環・昆虫)

アミメグンバイ *Campylosteira rotundata* Takeya, 1933 (カメムシ目: グンバイムシ科) は, 日本と中国に分布し, 国内では本州 (千葉県, 京都府), 四国 (愛媛県, 高知県), 九州 (福岡県) から確実な記録が知られている (Takeya, 1933, 1962; 石川ら, 2012; 日本昆虫目録編集委員会, 2016; 伴, 2021). 本種の寄主植物は不明だが, 千葉県では林床のコケ, 京都府と福岡県ではリターから採集されている (Takeya, 1962; 伴, 2021). 九州における本種の

採集例は少なく、福岡市東区、糟屋郡新宮町、同郡久山町（いずれも福岡県）にまたがる立花山で、1960年3月3日と同年同月6日に得られたのみである（Takeya, 1962）。

著者らは、2021年4月から2022年3月にかけて福岡県で本種を採集したので、九州および同県における61年ぶりの再発見としてここに報告する。検視標本はすべて相馬が保管している。

#### [検視標本]

5♂1♀, 福岡県糸島市井原（Fukuoka-ken, Itoshima-shi, Iwara）, 25. IV. 2021, 井上翔太（S. Inoue）採集；1♀, 同上, 3. V. 2021, 相馬純（J. Souma）採集；1♂, 同上, 4. X. 2021, 相馬純（J. Souma）採集；2♂1♀, 同上, 7. III. 2022, 相馬純（J. Souma）採集；1♀（図1）, 福岡県福岡市西区元岡九州大学伊都キャンパス（Fukuoka-ken, Fukuoka-shi, Nishi-ku, Motooka, Kyusyu University, Ito Campus）, 1. V. 2021, 辻尚道（N. Tsuji）採集；1♂, 福岡県北九州市小倉南区平尾台（Fukuoka-ken, Kitakyushu-shi, Kokuraminami-ku, Hiraodai）, 22. V. 2021, 橋爪拓斗（T. Hashizume）採集。

井原の個体は草地のコケ群落（図2）, 伊都キャンパスと平尾台の個体は草地のリターから得られた。今まで同一産地では数個体の採集例しかなかったが（cf. Takeya, 1933, 1962；石川ら, 2012；伴, 2021）, 井原では計11個体が継続的に得られたので、草地のコケ群落は本種の重要な生息環境の可能性がある。

#### [引用文献]

- 伴 光哲（2021）千葉県初記録のカメムシ亜目4種。房総の昆虫, (68): 46–47.
- 石川 忠・高井幹夫・安永智秀（編）（2012）日本原色カメムシ図鑑—陸生カメムシ類 Terrestrial Heteropterans— 第3巻. 576 pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 日本昆虫目録編集委員会（編）（2016）日本昆虫目録 第4巻 準新翅類. xxxiv + 630 pp. 日本昆虫学会・権歌書房, 福岡.
- Takeya, C. (1933) New or little-known lace-bugs from Japan, Corea and Formosa (Hemiptera: Tingitidae). *Mushi*, **6**: 32–39.
- Takeya, C. (1962) Taxonomic revision of the Tingidae of Japan, Korea, the Ryukyus and Formosa Part 1 (Hemiptera). *Mushi*, **36**(5): 41–75.



図1, 2. 1, 福岡県産アミメグンバイ, ♀; 2, 草地のコケ群落.



## 6 2 3 (Hem.: Tingidae) エゾナガグンバイの佐賀県からの初記録

相馬 純・久末 遊 (九大院・生資環・昆虫)

東アジアに広く分布するエゾナガグンバイ *Agramma (Agramma) japonicum* (Drake, 1948) (カメムシ目: グンバイムシ科) は, 国内では国後島, 北海道, 本州, 伊豆諸島 (八丈島), 佐渡島, 四国, 九州, 屋久島から知られており, スゲ類 *Carex* spp. (カヤツリグサ科) の葉に寄生する (Souma, 2020; 相馬, 2021). 九州における本種の採集例は少なく, 福岡県田川郡福智町と大分県玖珠郡九重町湯坪地蔵原湿原の 2 例があるに過ぎない (Souma, 2020).

著者らは, 佐賀県で本種を採集したので, 九州 3 例目および同県初記録としてここに報告する. 検視標本はすべて採集者が保管している.

## [検視標本]

3♂17♀ (図 1), 佐賀県唐津市厳木町天川天山 (Saga-ken, Karatsu-shi, Kyuragi-machi, Amagawa, Mt. Tenzan), 18. VI. 2022, 相馬純 (J. Souma) 採集; 5♂5♀, 同上, 久末遊 (Y. Hisasue) 採集; 2♂2♀, 佐賀県佐賀市富士町市川天山 (Saga-ken, Saga-shi, Fuji-cho, Ichikawa, Mt. Tenzan), 29. VI. 2022, 久末遊 (Y. Hisasue) 採集.

上記の計 34 個体はスゲ属の 1 種 *Carex* sp. (図 2) の葉から採集された.

## [引用文献]

Souma, J. (2020) The monocotyledon-feeding lace bugs of the genus *Agramma* from Japan (Hemiptera: Heteroptera: Tingidae). *Acta Entomologica Musei Nationalis Pragae*, **60**(2): 527–536.

相馬 純 (2021) 屋久島のグンバイムシ (カメムシ目: カメムシ亜目: グンバイムシ科). *Fauna Ryukyuan*, **63**: 29–39.



図 1, 2. 1, 佐賀県産エゾナガグンバイ, ♀; 2, スゲ属の 1 種.

6 2 4 (Hem.: Tingidae) *Baeochila horvathi* の福岡県からの 72 年ぶりの再発見

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

本州 (関東以南), 四国, 九州に広く分布する *Baeochila horvathi* Souma, 2020 (カメムシ目: グンバイムシ科) は, 一年を通じてキヅタ *Hedera rhombea* (Miq.) Bean (ウコギ科) の蔓から得られ, 冬期のみワジュロ *Trachycarpus fortunei* (Hook.) H.Wendl. (ヤシ科) の樹皮からも採集される (Souma, 2020; 山地, 2022). 福岡県における本種の記録は少なく, 福岡市中央区平尾 (1950 年 7 月 23 日採集) の 1 例があるのみである (Souma, 2020).

著者 (J. Souma) は、2022 年 6 月 4 日と同年 8 月 11 日に福岡市西区と糸島市 (いずれも福岡県) にまたがる糸島半島で本種を採集したので、福岡県における 72 年ぶりの再発見としてここに報告する。検視標本はすべて著者が保管している。

[検視標本]

1♀, 福岡県福岡市西区桑原 (Fukuoka-ken, Fukuoka-shi, Nishi-ku, Kuwabara), 4. VI. 2022; 1♂ (図 1), 福岡県糸島市志摩馬場 (Fukuoka-ken, Itoshima-shi, Shimababa), 11. VIII. 2022.

上記の 2 個体は広葉樹の樹幹に付着したツタ *Parthenocissus tricuspidata* (Siebold et Zucc.) Planch. (ブドウ科) (図 2) の蔓のビーティングにより採集された。本種が得られたツタの付近の広葉樹は、大半の樹幹にキヅタが付着していた。キヅタの蔓からは一年を通じて本種が採集されている (Souma, 2020)。したがって、本種のキヅタからツタへの一時的な移動が考えられる。他方で、本種が樹幹上の蔓植物を幅広く生息環境とする可能性もある。

糸島半島は現在のところ *Baeochila horvathi* の最も西の産地である。

[引用文献]

Souma, J. (2020) Discoveries of the genera *Baeochila* and *Idiocysta* from Japan, with descriptions of two new species (Hemiptera: Heteroptera: Tingidae). *Zootaxa*, **4731**(3): 388–402.

山地 治 (2022) カメムシ数種の記録と訂正. *すずむし*, (157): 6.

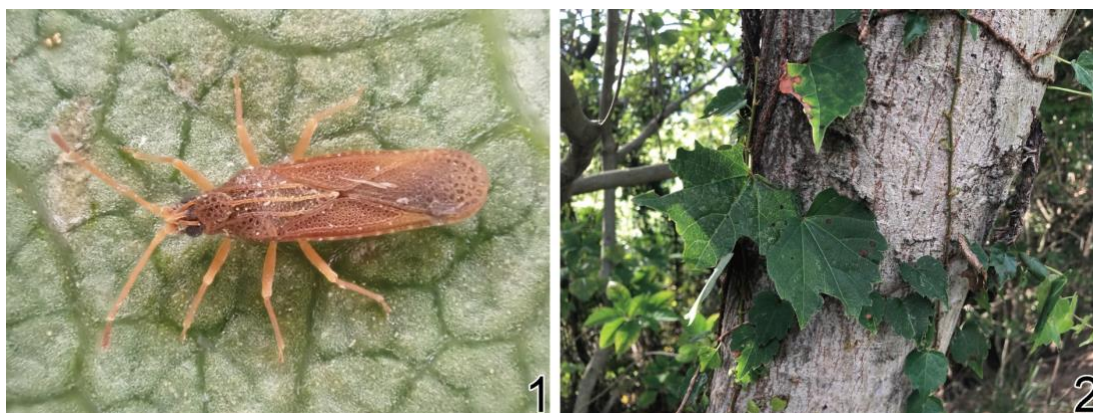


図 1, 2. 1, 福岡県産 *Baeochila horvathi*, ♂; 2, ツタ.

6 2 5 (Hem.: Tingidae) スコットグンバイの宮古列島からの初記録

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

スコットグンバイ *Stephanitis (Norba) scotti* Takeya, 1963 (カメムシ目: グンバイムシ科) は、九州, 天草諸島 (下島), 奄美群島 (奄美大島), 沖縄諸島 (沖縄本島), 八重山列島 (石垣島) から知られ, イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. (マンサク科) に寄生する (Miyamoto, 1964; 石川ら, 2012; 日本昆虫目録編集委員会, 2016; 野崎ら, 2016)。

著者 (J. Souma) は、宮古島で本種を採集したので、同島および宮古列島初記録としてここに報告する。検視標本は著者が保管している。

[検視標本]

1♂ (図 1), 琉球宮古列島宮古島城辺砂川 (the Ryukyus, Miyako Is., Miyako Is., Gusukubeuruka), 5. XI. 2022.

上記の個体はイスノキの葉 (図 2) から採集された。



[引用文献]

Miyamoto, S. (1964) Tingidae and Nabidae of the South-West Islands, Lying Between Kyushu and Formosa (Hemiptera). *Kontyû*, **32**(2): 271–280.

石川 忠・高井幹夫・安永智秀（編）（2012）日本原色カメムシ図鑑—陸生カメムシ類 Terrestrial Heteropterans— 第3巻. 576 pp. 全国農村教育協会，東京.

日本昆虫目録編集委員会（編）（2016）日本昆虫目録 第4巻 準新翅類. xxxiv + 630 pp. 日本昆虫学会・権歌書房，福岡.

野崎達也・野崎陽子・宇木浩太・塚田 拓（2016）熊本県天草諸島牛深地域の異翅亜目. *Rostria*, (60): 67–96.



図1, 2. 1, 宮古島産スコットグンバイ, ♂; 2, イスノキ.

### 6 2 6 (Hem.: Tingidae) アワダチソウグンバイの先島諸島への移入

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

北米原産のアワダチソウグンバイ *Corythucha marmorata* (Uhler, 1878) (カメムシ目：グンバイムシ科) は，国内では本州，四国，九州，対馬，甌島列島（下甌島）に移入しており，セイタカアワダチソウ *Solidago altissima* L. など多種のキク科草本に寄生する（石川ら，2012；日本昆虫目録編集委員会，2016；相馬，2018）。

著者（J. Souma）は，宮古島と石垣島で本種を採集したので，両島および先島諸島初記録としてここに報告する。検視標本はすべて著者が保管している。

[検視標本]

14♂6♀（図1），琉球宮古列島宮古島平良西里（the Ryukyus, Miyako Is., Miyako Is., Hiraranishizato），4. XI. 2022；30♂13♀（図3），琉球八重山列島石垣島白保（the Ryukyus, Yaeyama Is., Ishigaki Is., Shiraho），10. XI. 2022.

宮古島の計20個体は市街地，石垣島の計43個体は空港付近で多種のキク科草本（図2, 4）から採集された。アワダチソウグンバイはキク科草本の他にサツマイモ *Ipomoea batatas* (L.) Lam. (ヒルガオ科) やナス *Solanum melongena* L. (ナス科) を加害するので（農林水産省，2005），先島諸島での今後の発生状況は注視される必要がある。

[引用文献]

石川 忠・高井幹夫・安永智秀（編）（2012）日本原色カメムシ図鑑—陸生カメムシ類 Terrestrial Heteropterans— 第3巻. 576 pp. 全国農村教育協会，東京.

日本昆虫目録編集委員会（編）（2016）日本昆虫目録 第4巻 準新翅類. xxxiv + 630 pp. 日本昆虫学会・権歌書房, 福岡.

農林水産省（2005）我が国で新たに発生し分布を拡大しているグンバイムシ. 植物防疫病害虫情報, (77): 4-5.

相馬 純（2018）対馬初記録のカメムシ6種. *Rostria*, (62): 60-64.



図 1-4. 1, 3, アワダチソウグンバイ, 成虫 (1, 宮古島 ; 3, 石垣島) ; 2, 4, 生息環境 (2, 宮古島 ; 4, 石垣島) .

### 6 2 7 (Hem.: Miridae) *Stethoconus takaii* の九州と奄美群島からの初記録

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

*Stethoconus takaii* Nakatani & Yasunaga, 2018 (カメムシ目: カスミカメムシ科) は, 北海道, 本州, 四国, 屋久島から記録されている (Nakatani & Yasunaga, 2018 ; 相馬, 2021 ; 相馬・佐々木, 2021) . 本種が含まれるグンバイカスミカメ属 *Stethoconus* Flor, 1861 はグンバイムシ科 (カメムシ目) を選択的に捕食することで知られる (安永ら, 2001) . 現在のところ, 本種はワタナベグンバイ *Stephanitis (Stephanitis) watanabei* Takeya, 1963 とヤマグルマガンバイ *S. (S.) yasumatsui* Takeya, 1951 のコロニーから採集されている (Nakatani & Yasunaga, 2018 ; 相馬, 2021 ; 相馬・佐々木, 2021) .

著者 (J. Souma) は, 福岡県本土部と奄美大島で本種を採集したので, 両地域ならびに, 九州および奄美群島初記録としてここに報告する. 検視標本はすべて九州大学昆虫学教室に保管されている. 本研究の一部は JSPS 科研費 (JP20J20483) の助成を受けた.

[検視標本]

1♂, 福岡県糸島市志摩馬場 (Fukuoka-ken, Itoshima-shi, Shimababa) , 30. V. 2022 ; 1♀ (図



1), 福岡県糸島市泊 (Fukuoka-ken, Itoshima-shi, Tomari), 10. VII. 2022 ; 1♀ (図 2), 琉球奄美群島奄美大島宇検村湯湾 (the Ryukyus, Amami Isls., Amami-Oshima Is., Amami-shi, Uken-son, Yuwan), 28. IV. 2022.

志摩馬場の個体はヤブニッケイ *Cinnamomum yabunikkei* H. Ohba (クスノキ科) に発生するヤブニッケイグンバイ *S. (Norba) mendica* Horváth, 1912 のコロニー, 泊の個体はタブグンバイ *S. (N.) aperta* Horváth, 1912 とクスグンバイ *S. (S.) fasciicarina* Takeya, 1931 が数個体ずつ確認されたタブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc. (クスノキ科), 湯湾の個体はツツジ属の 1 種 *Rhododendron* sp. (ツツジ科) に発生するツツジグンバイ *S. (S.) pyrioides* (Scott, 1874) のコロニーから採集された. 上記の知見に加え, 北海道ではワタナベグンバイ, 四国と屋久島ではヤマグルマグンバイのコロニーから得られているので (Nakatani & Yasunaga, 2018 ; 相馬, 2021 ; 相馬・佐々木, 2021), *Stethoconus takaii* はツツジグンバイ属 *Stephanitis* Stål, 1873 の種を幅広く捕食する可能性がある.

奄美大島は現在のところ *Stethoconus takaii* の最も南の産地である.

[引用文献]

Nakatani, Y. & Yasunaga, T. (2018) Two new deraeocorine plant bug species from Japan (Heteroptera, Miridae, Deraeocorinae). *Zookeys*, **796**: 163–174.

相馬 純 (2021) 屋久島初記録のカスミカメムシ科 2 種. *Pulex*, (100): 858–860.

相馬 純・佐々木大介 (2021) グンバイカスミカメ属 2 種の北海道からの初記録. *Rostria*, (66): 38–39.

安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫 (編) (2001) 日本原色カメムシ図鑑—陸生カメムシ類 Terrestrial Heteropterans— 第 2 巻. 350 pp. 全国農村教育協会, 東京.

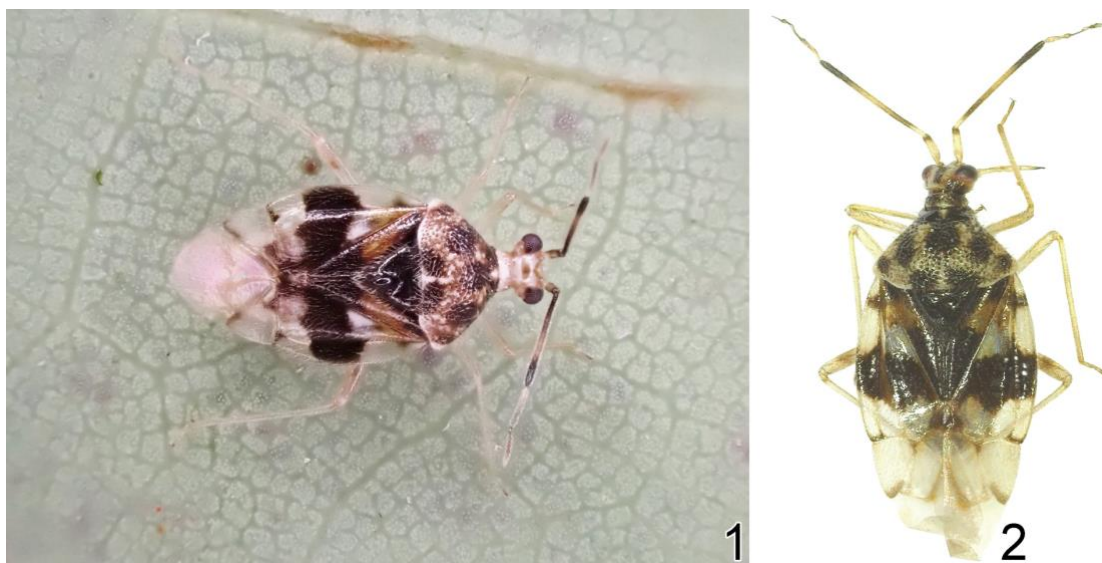


図 1, 2. *Stethoconus takaii*, ♀. 1, 福岡県 ; 2, 奄美大島.

## 6 2 8 (Pha.: Heteropterygidae) 沖縄諸島平安座島におけるコブナナフシの採集記録

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市) ・吉武 啓 (茨城県つくば市)

コブナナフシ *Pylaemenes japonicus* Ho, 2016 は、日本、中国および台湾に分布し、国内では、九州南部（大隅半島）と琉球列島に分布する（日本直翅類学会，2016；2021；日本昆虫目録編集委員会，2020）。沖縄諸島においては、これまでに沖縄島、伊平屋島、津堅島、渡嘉敷島、粟国島および久米島から記録されている（小浜，1989，1999；日本直翅類学会，2016，2021）。著者の一人である吉武が、本種を同諸島の平安座島で採集したので、同島初記録としてここに報告する。

## [採集標本データ]

1♂（図 1），平安座島（沖縄県うるま市与那城平安座），21. VIII. 2022，吉武採集・小浜同定，琉球大学博物館（風樹館）保管。

## [引用文献]

小浜継雄（1989）コブナナフシの分布記録と食草．月刊むし，(223): 42.

小浜継雄（1999）津堅島と多良間島におけるコブナナフシの記録．月刊むし，(342): 44.

日本直翅類学会編（2016）町田龍一郎（監修）日本産直翅類標準図鑑．384 pp. 学研プラス，東京.

日本直翅類学会編（2021）日本産直翅類分布表．ぱったりぎす，(165): 1-19. CD 版付録.

日本昆虫目録編集委員会編（2020）日本昆虫目録第 3 巻直翅系昆虫類．204 pp. 権歌書房，福岡.



図 1. 平安座島産コブナナフシ♂.

## 6 2 9 (Lep.: Tortricidae) 九州初記録のハマキガ亜科 2 種

鈴木信也 (九大院・生資環・昆虫) ・佐々木公隆 (福岡県福岡市)

ハマキガ亜科はチョウ目ハマキガ科に所属する亜科で、日本産種は神保（2021）で 8 族 232 種が挙げられており、その後 Suzuki & Jinbo (2022) によってさらに 1 種が報告されている。また、神保（2013）では、85 種のハマキガ亜科が九州に分布するとされている。

筆者らは九州各地での灯火採集、九州大学昆虫学教室の所蔵標本の調査を行った。その結果、九州から記録のなかったハマキガ亜科の 2 種を発見したため、報告する。

ツマオビセンモンホソハマキ *Eugnosta ussuriana* (Caradja, 1926) (図 1)

大分県由布市庄内町阿蘇野，1♀，13. VII. 2022，佐々木公隆採集（佐々木公隆所蔵）。

神保（2013）によると、本種は国内では北海道と本州から、国外ではロシア極東部から知られている。そのほか、Byun & Li (2006) によって中国からも報告されている。本種の寄主植物や生息環境については知られていないが、本個体は付近に溪流や林縁が存在する草地環境で得られた。



ニセトビモンコハマキ *Diplocalyptis nigricana* (Yasuda, 1975) (図 2)

福岡県添田町 鷹ノ巣山, 1♂1♀, 4. VI. 1994, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵) ; 福岡県添田町 英彦山, 1♂1♀, 31. V. 1954, 黒子浩採集 (九州大学昆虫学教室所蔵) ; 福岡県福岡市 油山, 1♀, 22. V. 1994, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵) ; 福岡県筑前町三箇山 夜須高原, 1♂, 30. VII. 1998, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵) ; 福岡県八女市 釈迦岳, 3♂1♀1ex., 28. VII. 2018, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵), 1♂1♀, 5. V. 2019, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵), 1♂, 15. V. 2019, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵), 1♂, 30. VII. 2021, 佐々木公隆採集 (佐々木公隆所蔵) ; 福岡県早良区板屋 脊振山, 1♂, 24. V. 2020, 広渡俊哉採集 (九州大学昆虫学教室所蔵), 4♂1♀, 14. V. 2021, 鈴木信也採集 (九州大学昆虫学教室所蔵), 6♂, 19. V. 2021, 鈴木信也採集 (九州大学昆虫学教室所蔵), 2♀, 19. V. 2021, 屋宜禎央採集 (九州大学昆虫学教室所蔵), 4♂, 19. V. 2021, 荒島弾採集 (九州大学昆虫学教室所蔵) .

神保 (2013) によると, 日本固有種で北海道, 本州, 四国から知られている. 本種は近縁種のトビモンコハマキ *Diplocalyptis congruentana* (Kennel, 1901) に酷似する. 神保 (2013) によると, トビモンコハマキが平地から山地帯下部に生息するのに対し, 本種は主に山地帯に分布するとされる. しかし, 脊振山では同日同所に両種が得られているため, これまでの九州におけるトビモンコハマキの記録の中には, 本種が含まれている可能性がある.

末筆ながら, ニセトビモンコハマキの調査に協力していただいた屋宜禎央博士, 外村俊輔氏, 荒島弾氏に厚く御礼申し上げる.

## [引用文献]

Byun, B.K. & Li, C.D. (2006) Taxonomic review of the tribe Cochylini (Lepidoptera: Tortricidae) in Korea and northeast China, with descriptions of two new species. *Journal of Natural History*, **40**(13–14): 783–817.

神保宇嗣 (2013) ハマキガ亜科. 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 (編). 日本産蛾類標準図鑑IV : 156–195. 学研教育出版, 東京.

Suzuki, S. & Jinbo, U. (2022) The first occurrence of a cochyline moth, *Eupoecilia ingens* Sun & Li (Lepidoptera: Tortricidae: Tortricinae) in Japan. *Lepidoptera Science*, **73**(1): 13–17.



図 1, 2. 1, ツマオビセンモンホソハマキ *Eugnosta ussuriana* (Caradja, 1926) ; 2, ニセトビモンコハマキ *Diplocalyptis nigricana* (Yasuda, 1975).

## 630 (Hym. Proctotrupidae) 福岡県英彦山のマレーゼトラップで得られた

シリボソクロバチ科

阿部純大 (九大院・生資環・昆虫)

シリボソクロバチ科は汎世界的に生息する内部寄生蜂である。低地から 2000 m を超える高山帯まで幅広い標高に生息し、森林や草地、河川敷など様々な環境から得られる(松本, 2020 ; Townes & Townes, 1981) 。甲虫目やキノコバエ類が主な宿主として知られるものの、生態の多くは不明である (Kolyada & Chemyreva, 2019) 。近年日本におけるファウナの解明が進み始め (Abe & Kolyada, 2021 ; 松本, 2020) , 現在は 14 属 44 種が知られる (Abe, 2022) 。

筆者は、福岡県田川郡添田町に位置する九州大学農学部附属彦山実験施設 (Mt. Hiko, Soeda-machi, Tagawa-gun, Fukuoka Pref., Kyushu, Japan) に保管されていた未マウントの標本から、シリボソクロバチ科を抽出した。このサンプル群は 1968–1973 年の 6 年間に施設の庭に設置されていた飛翔性昆虫用のトラップであるマレーゼトラップ (MT) (Skvala et al., 2020) で得られたものである。採集品は原則毎日回収され、三角紙またはシャーレに入れられていた。これらをすべて三角台紙標本とし、属または種ごとに整理した。結果、3 族 10 属 161 個体のシリボソクロバチ類が見出された。リストでは、同定できたもののうち、九州初記録となる種にアステリスク (\*) を付した。採集者は竹野功一氏 (K. Takeno leg.) とした。採集日は、三角紙またはシャーレ内のメモに記されていた日付としている。標本はすべて九州大学農学部昆虫学教室 (ELKU) に収蔵されている。

**Proctotrupinae 亜科****Disognini 族***Disognus* sp.

1♀, 19. VI. 1973.

**Cryptoserphini 族***Brachyserphus* spp.

1♂, 8. V. 1969; 1♂, 18. VI. 1969; 1♂, 7. V. 1971.

*Cryptoserphus aculeator* (Haliday, 1839)

1♀, 8. V. 1969; 1♀, 28. VII. 1970.

*Cryptoserphus longitarsis* (Thomson, 1858)\*

1♂, 7. V. 1969; 1♀, 21. X. 1970.

*Mischoserphus arcuator* (Stelfox, 1950)\*

1♀, 19. XI. 1968; 1♀, 5. XII. 1968.

*Mischoserphus samurai* (Pachorn-Walcher, 1964)

1♀, 7. V. 1969; 1♀, 24. V. 1972.

*Mischoserphus* spp.

1♀, 12. V. 1972; 1♀, 17. V. 1972.

*Nothoserphus afissae* (Watanabe, 1954)\*

1♂, 4. XI. 1971.

*Nothoserphus scymni* (Ashmead, 1904)

1♀, 16. IX. 1968; 1♂, 2. XI. 1968; 1♀, 20. XI. 1968; 1♀, 3. VII. 1969; 2♀, 11. VIII. 1970; 1♀, 2. XI. 1970; 1♀, 18. XI. 1970; 1♀, 28. VII. 1971; 1♀, 26. XI. 1971; 1♂, 5. VI. 1972; 1♀, 4. VIII. 1972; 1♀, 17. VII. 1973; 1♀, 30. X. 1973.

*Tretoserphus laris* (Haliday, 1839)\*

1♂, 8. XII. 1968; 1♀, 25. III. 1969; 1♀, 3. IV. 1969; 1♀, 31. III. 1970.

*Tretoserphus* sp.

1♀, 4. XII. 1968; 1♂, 23. IV. 1970; 1♀, 19. IV. 1971; 1♀, 20. IV. 1971; 1♀, 11. IV. 1972.

**Proctotrupini 族**

*Codrus ciliatus* Townes, 1981\*

1♀, 18. XI. 1970; 1♀, 13. V. 1971; 1♀, 18. X. 1971.

*Codrus nebriae* (Watanabe, 1954)\*

1♂, 21. X. 1970; 1♂, 30. V. 1973.

*Codrus niger* Panzer, 1803

1♀, 5. VI. 1972.

*Exallonyx japonicus* (Ashmead, 1904)

1♂, 19. XI. 1968; 1♂, 10. VI. 1969; 1♂, 18. VI. 1969; 1♂, 23. VI. 1969; 1♂, 24. VII. 1969; 1♀, 9. IX. 1969; 1♀, 13. XI. 1969; 1♂, 31. VII. 1970; 1♂, 10. VIII. 1970; 1♂, 1. X. 1970; 1♂, 6. X. 1970; 1♂, 21. X. 1970; 1♂, 22. VI. 1971; 1♂, 5. VII. 1971; 1♀, 9. IX. 1971; 1♂, 18. X. 1971; 1♂, 4. XI. 1971; 1♂, 4–5. XI. 1971; 1♂, 28. VI. 1972; 1♀, 17. VII. 1972; 1♂, 3. VIII. 1972; 1♂1♀, 19. VI. 1973; 1♂, 21. VI. 1973; 1♂, 30. X. 1973; 1♂, 2. XI. 1973; 1♂, 5. XI. 1973.

*Exallonyx* spp.

1♂, 4. XI. 1968; 1♂, 3. XII. 1968; 1♂1♀, 20. IV. 1969; 2♀, 2. V. 1969; 2♀, 2–3. V. 1969; 2♀, 3. V. 1969; 1♀, 22. V. 1969; 2♀, 26. V. 1969; 1♂, 26–29. V. 1969; 1♀, 29. V. 1969; 1♂, 30. V. 1969; 1♀, 5. VI. 1969; 1♀, 10. VI. 1969; 1♀, 18. VI. 1969; 1♀, 21. VII. 1969; 1♂, 2. VI. 1970; 1♂1♀, 8. VI. 1970; 1♀, 23. VII. 1970; 2♀, 5. VIII. 1970; 1♀, 6. VIII. 1970; 1♂, 10. VIII. 1970; 1♀, 11. VIII. 1970; 1♂, 21. X. 1970; 1♂, 9. XI. 1970; 1♂, 18. XI. 1970; 1♀, 20. V. 1971; 1♂, 1. VI. 1971; 1♂, 21. X. 1971; 1♂, 22. X. 1971; 1♂, 2. XI. 1971; 1♀, 18. V. 1972; 1♀, 24. V. 1972; 3♀, 5. VI. 1972; 1♂, 9. VI. 1972; 1♀, 14. VI. 1972; 1♀, 27. VII. 1972; 1♀, 4. VIII. 1972; 1♀, 10. V. 1973; 1♀, 14. V. 1973; 1♂, 30. V. 1973; 2♀, 1. VI. 1973; 1♀, 12. VI. 1973; 1♂1♀, 13. VI. 1973.

*Phaneroserphus cristatus* Townes, 1981

1♂, 24. VII. 1969; 1♂, 13. XI. 1969; 1♂, 19. V. 1970; 2♀, 28. VII. 1970; 1♂1♀, 10. VIII. 1970; 1♂, 17. XI. 1970; 1♂, 6. VI. 1971; 1♂, 28. VII. 1971; 1♂, 28. X. 1971; 1♂, 11. V. 1972; 1♀, 27. VII. 1972; 2♀, 2. VIII. 1972; 1♂2♀, 4. VIII. 1972; 1♂, 31. VIII. 1972; 1♂, 9. VI. 1973; 1♀, 13. VI. 1973; 1♀, 25. VI. 1973; 1♂, 17. VII. 1973.

*Phaneroserphus* sp.

1♂, 17. VII. 1973.

*Proctotrupes gravidator* (Linnaeus, 1758)

1♀, 3. XI. 1968; 1♀, 7. XI. 1969; 1♀, 13. XI. 1969; 1♀, 27. XI. 1969; 1♀, 23. X. 1970; 1♀, 21. X. 1971; 1♀, 20. XI. 1971; 3♀, 22. XI. 1971; 1♂, 26. XI. 1971; 1♀, 30. X. 1973; 1♀, 13. XI. 1973.

シリボソクロバチ科以外の昆虫も含め、1-2月のサンプルはほとんど施設に残されていなかったが、この期間はトラップを設置していなかったためか低温により採集できなかったためかは不明である。一方で、いくつかの分類群 (*Exallonyx* 属, *Mischoserphus* 属, *Tretoserphus* 属) では他のハチ類の活動がほとんど見られない冬季の12月に得られていたことは特筆すべきであろう。

末筆となったが、施設での標本調査に協力いただいた屋宜禎央氏、武田宏氏、トラップ設置当時の状況についてご教示いただいた広渡俊哉氏と大原賢二氏、調査協力に加えて本稿に有益なコメントをいただいた三田敏治氏に厚く御礼申し上げます。

Abe, J. (2022) First record of the genus *Oxyserphus* Masner, 1961 (Hymenoptera: Proctotrupidae) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **28**: 23–25.

Abe, J. & Kolyada, V. (2021) First record of the genus *Phoxoserphus* Lin, 1988 (Hymenoptera: Proctotrupidae) from Japan. *Zootaxa*, **5057**: 597–600.

Kolyada, V. & Chemyreva, V. (2019) 22. Proctotrupidae. In: S. Belokobylskij and A. Lelej (Eds), *Proceedings of the Zoological Institute of the Russian Academy of Sciences. Annotated catalogue of the Hymenoptera of Russia*, **2**: 30–34. Zoological Institute RAS, St Petersburg.

松本健児 (2020) シリボソクロバチ科寄生蜂の分布記録. 神奈川虫報, (203): 59–65.

Skvarla, M., Larson, J., Fisher, J. & Dowling, A. (2020) A review of terrestrial and canopy malaise traps. *Annals of the Entomological Society of America*, **114**: 27–47.

Townes, H. & Townes, M. (1981) A revision of Serphidae (Hymenoptera). *Memoirs of the American Entomological Institute*, **32**: 1–541.

6 3 1 (Lep.: Nymphalidae) 大阪市立自然史博物館所蔵の福岡県産

サトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモン

長田庸平 (大阪市立自然史博物館)

チョウ目タテハチョウ科の“ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe* [Denis & Schiffermüller, 1775]”とされてきた種は、最近になって形態や分子によってサトウラギンヒョウモン *F. pallascens* (Butler, 1873), ヤマウラギンヒョウモン *F. nagiae* Shinkawa & Iwasaki, 2019, ヒメウラギンヒョウモン *F. kunikanei* Shinkawa & Iwasaki, 2019 の3種に整理された (新川・岩崎, 2019) . これらのうち、奥尻島産サトウラギンヒョウモンは亜種 *kandai* Shinkawa & Iwasaki,

2019 として記載された。

九州地方においては、鹿児島県と宮崎県でサトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモンの2種が分布していることが明らかになり（岩崎, 2019; 岩崎, 2020）, サトウラギンヒョウモンは低標高地～高標高地から, ヤマウラギンヒョウモンは高標高地から記録されている。福岡県には“ウラギンヒョウモン”は分布しており（博多昆虫同好会, 2019）, 福岡県レッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されている（福岡県環境部自然環境課, 2014）。

大阪市立自然史博物館収蔵目録資料第1集（日浦, 1969）には“ウラギンヒョウモン”の福岡県の福岡市平尾と英彦山のデータが記載されている。分類体系が変わった現在, “ウラギンヒョウモン”とされるこれらの標本が正確にどの種に該当するか再検討の必要性が生じた。

そこで, 筆者は大阪市立自然史博物館に所蔵されている日浦（1969）収録の福岡県産ウラギンヒョウモンの標本2個体を用いて, 翅形と交尾器形態の観察を行った。両種の識別点として, 前翅の外縁はサトウラギンヒョウモンではくびれ, ヤマウラギンヒョウモンでは直線的という特徴があるが（新川・岩崎, 2019）, 個体変異幅があつて外見だけでは区別は困難である。雄交尾器のウックスは, サトウラギンヒョウモンでは先端の突出は強く, ヤマウラギンヒョウモンでは先端の突出は弱いという特徴があり（新川・岩崎, 2019）, 雄交尾器を調べることで識別可能である。

翅形や雄交尾器の形状から, 福岡市平尾産はサトウラギンヒョウモン, 英彦山産はヤマウラギンヒョウモンであることが判明したので, 以下の通りにデータを示す。[]は当館の標本番号である。

#### [データ]

1. サトウラギンヒョウモン *Fabriciana pallescens pallescens* (Butler, 1873)  
1♂, 福岡市平尾, 3. VI. 1941, 白水・福島採集 [116688] (図1-2)
2. ヤマウラギンヒョウモン *Fabriciana nagiae* Shinkawa & Iwasaki, 2019  
1♂, 英彦山, 7. VII. 1962, 吉阪採集 [15917] (図3-4)

#### [引用文献]

- 福岡県環境部自然環境課（2014）福岡県レッドデータブック 2014 福岡県の希少野生生物. 276 pp. 福岡県環境部自然環境課, 福岡.
- 博多昆虫同好会（2019）福岡県の蝶. 147 pp. 博多昆虫同好会, 福岡.
- 日浦 勇（1969）大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第1集 日本列島の蝶 第1部（アゲハチョウ科, シロチョウ科, マダラチョウ科, ジャノメチョウ科, タテハチョウ科）. 120 pp. 大阪市立自然科学博物館, 大阪.
- 岩崎郁雄（2019）鹿児島県のヤマウラギンヒョウモンとサトウラギンヒョウモン—その分布と変遷—. *SATSUMA*, (164): 3-15.
- 岩崎郁雄（2020）宮崎県のヤマウラギンヒョウモンとサトウラギンヒョウモン—分布と形態・生態・変遷—. *Insecta Miyazaki*, (8): 1-14.
- 新川 勉・岩崎郁雄（2019）日本のウラギンヒョウモン. 127 pp. ヴィッセン出版, 宮崎.



図 1-4. 1, 福岡市平尾産サトウラギンヒョウモン; 2, 図1の雄交尾器のウックス; 3, 英彦山産ヤマウラギンヒョウモン; 4, 図3の雄交尾器のウックス.

### 6 3 2 (Lep.: Arctiidae) ムラマツカノコを沖縄諸島屋我地島で採集

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市)

ムラマツカノコ *Syntomoides imaon* (Cramer, 1779) (ヒトリガ科) は、台湾、中国から東南アジアに分布し、国内では 2004 年に与那国島で発見されている (Owada, 2004) . その後本種は、琉球列島において分布域を拡大し、2009 年に石垣島、2010 年に宮古島で確認され、他に宮古・八重山諸島の西表島、波照間島、多良間島で記録されている (塚越, 2010 ; 青木, 2013, 2014 ; 岩下, 2013 ; 砂川・小浜, 2017) . そして、2020 年には沖縄島に達し (木村, 2021) , 翌 2021 年には慶良間諸島座間味島 (石川, 2022)



図 1. 屋我地島産ムラマツカノコ.

で、さらに 2022 年には奄美諸島の徳之島 (富士, 2022) でも確認されている. 筆者は沖縄諸島の屋我地島において本種を採集しているので、同島初記録として報告する.

[採集標本データ]

1ex, 屋我地島我部（沖縄県名護市），27. IX. 2022, 筆者採集・同定, 琉球大学博物館（風樹館）保管（図1）

午前11時ごろ、農道を、地上1~1.5mの高さで緩やかに飛ぶ2頭を確認し、そのうちの1頭を採集した。

[引用文献]

青木一幸（2013）宮古島でムラマツカノコを確認。月刊むし，(512): 47.

青木一幸（2014）波照間島でムラマツカノコを採集。月刊むし，(524): 55.

富士雅章（2022）徳之島で確認されたムラマツカノコ。SATSUMA, (170): 84.

石川順也（2022）ムラマツカノコを慶良間諸島座間味島で採集。蛾類通信，(301): 33.

岩下幸平（2013）西表島のムラマツカノコ。蛾類通信，(267): 415.

木村正明（2021）ムラマツカノコ沖縄島の記録。月刊むし，(600): 63.

Owada, M. (2004) On the syntomine moth *Syntomoides imaon* (Lepidoptera, Arctiidae) new to the Ryukyus and Taiwan. *Tinea*, **18**: 103–107.

砂川博秋・小浜継雄（2017）宮古諸島の蛾。宮古島市総合博物館紀要，(21): 193–234.

塚越章雄（2010）石垣島にてムラマツカノコを採集。月刊むし，(468): 47.

**6 3 3 (Lep.: Gelechiidae) チャマダラノコメキバガの九州からの記録**

外村俊輔（九大院・生資環・昆虫）

チャマダラノコメキバガ *Hypatima teramotoi* Ueda, 2012 はキバガ科フサキバガ亜科に属し、灰褐色の前翅に複数の黒条と隆起した鱗粉を持つことで特徴付けられる（Ueda, 2012）。幼虫はアベマキ、アラカシ、ウバメガシ、クヌギ、コナラ、フモトミズナラといったブナ科の葉や新芽を寄主とする（宮野，2015；上田，2013）。本種はこれまで本州、石垣島、西表島から知られており（Ueda, 2012），原記載の和文摘要では分布域として九州が示されていたが、これは琉球の誤表記と考えられ、九州の記録はこれまで確認されなかった。筆者は九州から本種を得たので分布の新記録として報告する。標本は筆者が保管している。

[採集データ]

1♂2♀：Ozasa, Chuo-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka-Pref., 1♀, 20. II. 2021; 1♀, 26. V. 2022; 1♂, 12. XI. 2022, 筆者採集・保管。（図1）

1♂1♀：Hatanobori, Oita-shi, Oita-Pref., 15. VIII. 2022, larva, 1♂1♀, 1. IX. 2022 em., 筆者採集・保管，寄主：ウバメガシ。

大分県の個体は植栽のウバメガシの若葉を摂食していた（図2）。

末筆になるが、本種の飼育に協力いただいた奥尉平博士（九州大学）に厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

宮野昭彦（2015）フモトミズナラにつく蛾類（2）。誘蛾燈，(219): 8–12.

Ueda, T. (2012) Four new species of the tribe Chelariini (Lepidoptera, Gelechiidae) from Japan. *Lepidoptera Science*, **63**(2): 79–86.

上田達也（2013）カザリキバガ亜科・フサキバガ亜科。広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則（編），日本産蛾類標準図鑑 III：293–316。学研教育出版，東京。





図1, 2. 1, 福岡県のチャマダラノコメキバガ♀; 2, 幼虫によるウバメガシ若葉の摂食部位.

#### 6 3 4 (Lep.: Batrachedridae) 九州初記録のスゴモリキバガ類

外村俊輔 (九大院・生資環・昆虫) ・屋宜禎央 (九大院・農・昆虫)

ヤブミョウガスゴモリキバガ *Idioglossa polliacola* Sugisima, 2000 は, 黄色の地色に4個の銀色の斑紋によって彩られた細長い前翅を有し, 後翅にも同様の斑紋があることが特徴である (Sugisima & Arita, 2000). ヒロバスゴモリキバガ *Epimarptis hiranoi* Sugisima, 2004 は, 黄色の地色に2個の暗褐色の三角紋を持つ前翅が特徴である (Sugisima, 2004). 両種は日本産蛾類標準図鑑ではホソキバガ科 Batrachedridae に所属するが, 近年の分子系統解析ではこの2属で独立の科 Epimarptidae を構成することが提唱されている (Wang & Li, 2020). ヤブミョウガスゴモリキバガの幼虫は主にヤブミョウガと稀にツユクサを寄主とし, 葉裏に糸をドーム状に綴った巣を作製し, 葉表の表皮を残して組織を食べ進むことが知られる (杉島, 2013). 日本固有種で本州各地から得られており (Sugisima & Arita, 2000), 沖縄島からコヤブミョウガ, シマツユクサ, オオシンジュガヤを寄主とする個体群が知られる (富永, 2019). ヒロバスゴモリキバガの幼虫はクリ, コナラ, モンゴリナラ, サトザクラ, バッコヤナギの葉にブローチ状の巣を作製してそれらを摂食することが知られ (奥, 2017; Heo, 2021), 国内では本州, 国外では韓国から記録がある (杉島, 2013; Kim & Lee, 2016). 筆者らは九州から両種を採集, 確認したので報告する. 標本は九州大学昆虫学教室に保管されている.

#### [採集データ]

ヤブミョウガスゴモリキバガ *Idioglossa polliacola* Sugisima, 2000

1♂2♀ : Kyushu Univ., Kuwabara, Nishi-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka-Pref., 2♀, 23. XI. 2021, larva, 21, 26. I. 2022 em.; 1♂, 5. X. 2021, larva, 26. XI. 2021 em., 屋宜採集, 寄主: ヤブミョウガ.

2♂ : Minami-koen, Chuo-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka-Pref., 23. X. 2021, larva, 2♂, 23. XI. 2021 em., 外村採集, 寄主: ヤブミョウガ. (図1)

食痕を確認 : Hatanobori, Oita-shi, Oita-Pref., 15. VIII. 2022., 外村観察, 寄主: ヤブミョウガ.

ヒロバスゴモリキバガ *Epimarptis hiranoi* Sugisima, 2004

1♂ : Mt. Asaji, Mitsushima, Tsushima-shi, Nagasaki-Pref., 20. V. 2022, LT (light trap), 屋宜採集. (図2)

ヤブミョウガスゴモリキバガは各採集地にてヤブミョウガの葉1枚あたり1~4個程度の



巢を作製している様子が複数確認されたことから、生息地での個体数は少なくないと思われる(図 3, 4)。採集地の一つである九州大学伊都キャンパスでは何度も灯火採集が行われているが、これまで本種が得られたことはなく、灯火に誘引されにくい生態であることが示唆される。一方で、ヒロバスゴモリキバガが採集されたのは、対馬のアベマキ林内で、前種と異なりライトトラップに飛来しており、アベマキが寄主であることが示唆される。

本稿を執筆するにあたり、文献を提供いただいた上原友太郎氏(九州大学)に厚く御礼申し上げます。

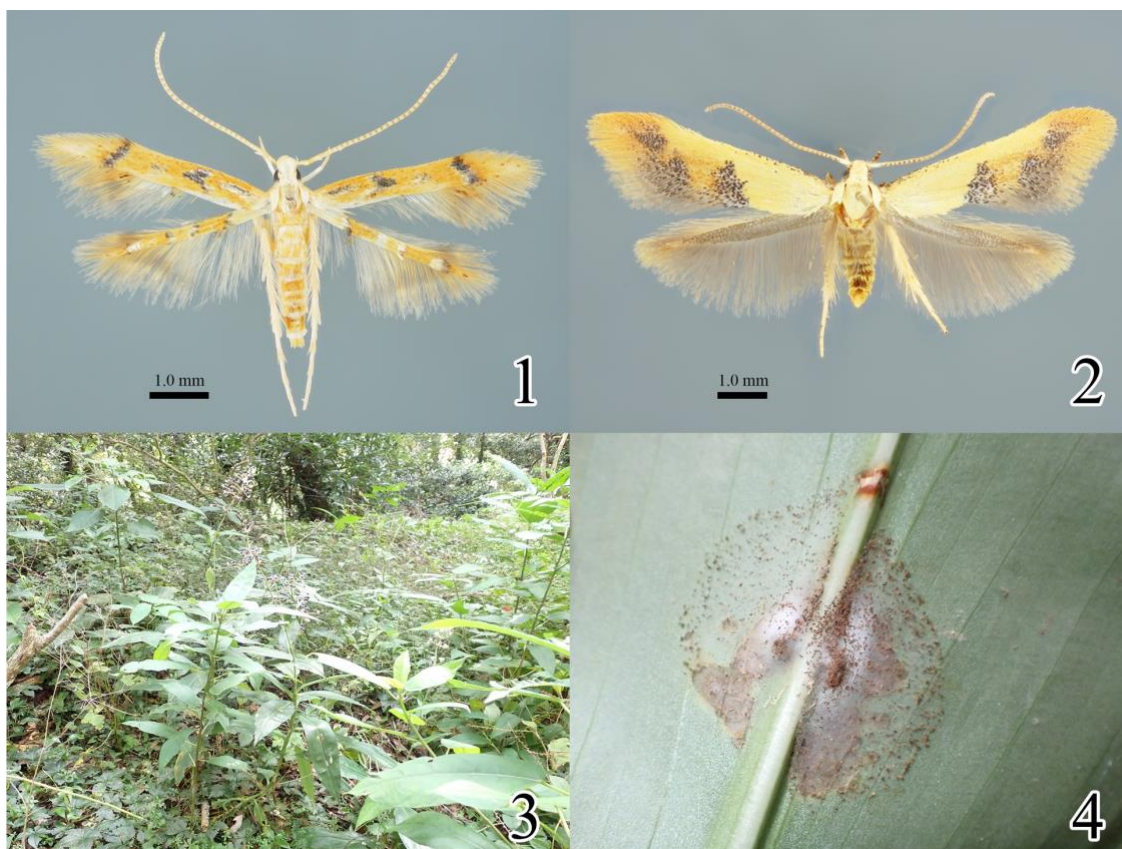


図 1-4. 1, 福岡県南公園のヤブミョウガスゴモリキバガ♂; 2, 対馬のヒロバスゴモリキバガ♂; 3, 南公園のヤブミョウガスゴモリキバガ生息環境; 4, ヤブミョウガの葉裏のヤブミョウガスゴモリキバガ幼虫の巢。

#### [引用文献]

Heo, U. (2021) *Guidebook of Moth Larvae 3*. 430 pp. Econature, Paju.

Kim, S. & Lee, S. (2016) First record of family Epimarptidae Meyrick (Lepidoptera: Gelechioidea) from Korea, with newly recorded species. *Journal of Asia-Pacific Biodiversity*, **9**: 481–484.

奥 俊夫 (2017) 身の虫雑記 VIII. 岩手蟲乃會會報, (44): 22–24.

Sugisima, K. & Arita, Y. (2000) A new species of a gelechioid genus, *ldioglossa* Walsingham (Lepidoptera, Batrachedridae, Batrachedrinae), from Japan. *Transactions of the Lepidopterological Society of Japan*, **51**(4): 319–336.

Sugisima, K. (2004) Discovery of the genus *Epimarptis* Meyrick, 1914 (Gelechioidea: Coleophoridae s.l.) in Japan, with the description of a new species. *Nota lepidopterologica*, **27**(2/3): 199–216.

杉島一広 (2013) ホソキバガ科. 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則 (編), 日本産蛾類標準図鑑 III: 224–227. 学研教育出版, 東京.

富永 智 (2019) 沖縄における蛾類幼虫の採集地記録 6 (14) (15) (19) (20) (34) (39) (53)~(56).  
琉球の昆虫, (43): 54-76.

Wang, Q. & Li, H. (2020) Phylogeny of the superfamily Gelechioidea (Lepidoptera: Obectomera),  
with an exploratory application on geometric morphometrics. *Zoologica Scripta*, **49**: 307-328.

### 6 3 5 (Lep.: Macroheterocera) 福岡県における大型鱗翅類 10 種の記録

屋宜禎央 (九大院・農・昆虫)

蛾類は、大半が植食性で植物との関わりが密接であり、種数が多いこと、夜間の灯火へ非常に多様な種が飛来することなどから、環境指標性が近年着目されている (立岩ら, 2012)。

福岡県における蛾類の記録は、河村 (1984) でまとめられ、近年は、地域ごとの記録 (例えば佐々木, 2017, 2019) などによりそれなりに記録が増えているが、蝶などの愛好家の多い分類群と比べると充実度は決して高くはない。

筆者は福岡県において、今まで記録のなかったナマリキシタバ *Catocala columbina* Leech, 1900 を含む新記録および希少とされている大型鱗翅類を複数採集しているの、ここに記録する。種名の後に福岡県レッドデータブック 2014 で指定されたランクか、分布新記録を明記した。標本は全て筆者が採集し、九州大学農学部昆虫学教室に所蔵されている。

[標本データ]

カギバガ科 Drepanidae

#### 1. サカハチトガリバ *Kurama mirabilis* (Butler, 1879) 準絶滅危惧 (NT)

1♂, 田川郡添田町英彦山 彦山生物学実験施設 (Hikosan Biological Laboratory, Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 24. IV. 2014 (図 1); 1♀, 同所, 1. V. 2014.

アカガシ, クヌギ, ミズナラ (以上ブナ科)などを寄主とする種で、北部九州では九千部山で記録がある程度で記録が少ない (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

ツバメガ科 Uraniidae

#### 2. ギンツバメ *Acropteris iphiata* (Guenée, 1857) 絶滅危惧 II 類 (VU)

1♂, 福岡市西区元岡 九州大学伊都キャンパス (Ito campus, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka-shi), 12. VI. 2022. (図 2)

成虫は灯火に飛来することがまれとされている (大和田, 2011) ことも影響しているかもしれないが、県内の記録は散発的で、分布は局所的である (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

カレハガ科 Lasiocampidae

#### 3. スカシカレハ *Amurilla subpurpurea* (Butler, 1881) 情報不足 (DD)

2♂, 田川郡添田町英彦山 彦山生物学実験施設 (Hikosan Biological Laboratory, Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 29. VIII. 2014.

福岡県内では今回採集された英彦山周辺において記録がある (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

シャチホコガ科 Notodontidae

#### 4. ヒナシャチホコ *Micromelalopha troglodyta* (Graeser, 1890) 九州新記録

1♂, 福岡市東区箱崎 九州大学箱崎キャンパス (Kyushu Univ., Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka-shi), 6. IV. 2018. (図 3)

箱崎キャンパス農学部 1 号館の 3 階トイレの明かりに飛来した個体を採集した。国内では北海道、本州、四国に分布し、ヤマナラシ、セイヨウハコヤナギを寄主とすることが知られている（以上ヤナギ科ヤマナラシ属）。ヤマナラシ属は九州には自生しないが、本個体が採集された箱崎キャンパスにはセイヨウハコヤナギ、ギンドロといったヤマナラシ属が生えていたので、それらの植物を利用していただけと考えられる。おそらく移入によるものだが詳細は不明であり、現在は箱崎キャンパスの解体に伴い生息地はなくなったと考えられる。

5. ハネブサシャチホコ *Platychasma virgo* Butler, 1881 絶滅危惧 II 類 (VU)

1♂, 田川郡添田町英彦山 (Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 29. IV. 2017. (図 4)  
寄主植物がカジカエデ (ムクロジ科) に限られるため、分布は局所的である (福岡県環境部自然環境課, 2014)。成虫が 6 月, 8 月ごろ出現する年 2 化と言われているが, 4 月にも成虫が得られているため, 場所によっては 3 化以上する可能性がある。

Erebidae

6. ナマリキシタバ *Catocala columbina* Leech, 1900 福岡新記録

1♂, 田川郡添田町英彦山 彦山生物学実験施設 (Hikosan Biological Laboratory, Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 16. VII. 2020. (図 5)  
彦山生物学実験施設の前で行ったライトトラップに飛来した。東北から九州に局所的に分布し, シモツケ属 (バラ科) を寄主とする (西尾, 2009)。九州においては佐賀県, 熊本県, 大分県で記録がある (大分県, 2022; 熊本県希少野生動植物検討委員会, 2019)。

7. コシロシタバ *Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874 準絶滅危惧 (NT)

1♂, 北九州市小倉北区富野 (Tomino, Kokurakita-ku, Kitakyushu-shi), 15. VIII. 2022. (図 6)  
小文字山山麓で, 5W のブラックライトに飛来した。東北から九州まで分布し, クヌギやアベマキ (以上ブナ科) を寄主とする (西尾, 2009)。福岡県では 1970 年代まで各地で記録されているが, その後は記録が激減している (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

ヤガ科 Noctuidae

8. アオバセダカヨトウ *Mormo mucivirens* Butler, 1878 準絶滅危惧 (NT)

1♀, 田川郡添田町英彦山 彦山生物学実験施設 (Hikosan Biological Laboratory, Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 26. IX. 2014.  
1960 年代まで県内各地に記録が多いが, その後の記録は急減している (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

9. ウスアオキリガ *Lithophane venusta* (Leech, [1889]) 絶滅危惧 II 類 (VU)

1♀, 田川郡添田町英彦山 (Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 29. IV. 2017.  
福岡県, 大分県, 熊本県の夏緑樹林帯の深い森にわずかに生息する (福岡県環境部自然環境課, 2014)。

10. エグリキリガ *Teratoglaea pacifica* Sugi, 1958 絶滅危惧 II 類 (VU)

1♂, 田川郡添田町英彦山 彦山生物学実験施設 (Hikosan Biological Laboratory, Hikosan, Soeda-machi, Tagawa-gun), 19. III. 2014; 1♂, 同所, 2. IV. 2014; 1♀, 同所, 23. V. 2014.

福岡県では分布は局地的であり、幼虫はトドマツ（マツ科）で記録があるため、モミ属を寄主とすると考えられている（福岡県環境部自然環境課，2014）。

[引用文献]

大分県自然環境学術調査会（2011）レッドデータブックおおいた 2011. 大分県の絶滅のおそれのある野生生物. 249 pp. 大分県生活環境部生活環境企画課. 大分.

熊本県希少野生動植物検討委員会（2019）レッドデータブックくまもと 2019—熊本県の絶滅のおそれのある野生動植物—. 632 pp. 熊本県環境生活部自然保護課. 熊本.

福岡県環境部自然環境課（編）（2014）福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック 2014. 280 pp. 福岡県環境部自然環境課. 福岡.

西尾規孝（2009）日本の *Catocala*. 373 pp. 佐久印刷所. 長野.

大和田守（2011）ツバメガ科. 岸田泰則（編），日本産蛾類標準図鑑Ⅰ: 127–131. 学研教育出版，東京.

佐々木公隆（2017）2013–2016年に平尾台（福岡県北九州市小倉南区）において撮影した蛾類の記録. 博多虫, (19): 60–110.

佐々木公隆（2019）九千部山山塊で撮影した蛾類. 博多虫, (22): 1–36.



図 1-6. 1, サカハチトガリバ; 2, ギンツバメ; 3, ヒナシャチホコ; 4, ハネブサシャチホコ; 5, ナマリキシタバ; 6, コシロシタバ. スケール: 10 mm.

## 6 3 6 (Col.: Curculionidae) 沖永良部島初記録の広義クチカクシゾウムシ亜科甲虫

今田舜介 (九大院・生資環・昆虫)・辻 尚道 (九大博)

沖永良部島は奄美群島の南西部に位置する島である。同島におけるゾウムシ科甲虫の記録報告は不十分である。クチカクシゾウムシ亜科についても例外ではなく、数種が記録されているに過ぎない(例: 佐々木ら, 2002; Tsuji & Yoshitake, 2020)。

第一著者の今田は 2022 年 6 月 25~27 日の期間に沖永良部島にて調査を行い、若干のクチカクシゾウムシ亜科甲虫を得た。この調査で採集された標本と、第二著者の辻が検する機会を得た標本中に、同島未記録種が含まれていたため、ここに報告する。なお、標本は辻が種同定をおこない、九州大学総合研究博物館 (KUM, 福岡市) および吉武啓博士個人コレクション (CHY, つくば市) に保管される予定である。

本報告にあたり、辻に貴重な標本をご貸与いただいた吉武啓博士 (農研機構)、および九州大学総合研究博物館の標本調査についてご許可・ご協力いただいた故・森本桂博士、丸山宗利博士にお礼申し上げます。本研究の一部は JSPS 科研費 JP20J2233 (今田) の支援を受けた。

1. ウンモンナガクチカクシゾウムシ琉球亜種 *Rhadinomerus unmon ryukyuensis* Morimoto, 1987  
1 ex., 大山植物園 (KUM).
2. ウスチャメカクシゾウムシ *Mechistocerus ochraceus* Morimoto, 1987  
3 exs., 大山, 16. X. 2010, 青木淳一採集 (KUM).
3. フナガタクチカクシゾウムシ *Sternochetus navicularis* (Roelofs, 1875)  
1 ex., 大山植物園 (KUM); 1 ex., 同所, 21. V. 2016, 吉武啓採集 (CHY).
4. ヒサゴクチカクシゾウムシ *Simulatacalles simulator* (Roelofs, 1875)  
1 ex., 大山植物園 (KUM).

## [引用文献]

- 佐々木健志・木村正明・河村 太 (2002) コウチュウ目. 東 清二 (監修)・屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱継雄・佐々木健志・木村正明・河村 太 (編) 琉球列島産昆虫目録: 159-284. 沖縄生物学会, 沖縄.
- Tsuji, N. & Yoshitake H. (2020) A taxonomic study of the Gasterocercini genus *Orochlesis* Pascoe (Coleoptera, Curculionidae, Cryptorhynchinae) in Japan. *Elytra, Tokyo* (n. ser.), **10**: 65-103.

## 6 3 7 (Hemi.: Pentatomidae) 熊本県におけるヒラタトガリカメムシの記録

上原友太郎 (九大院・生資環・昆虫)

ヒラタトガリカメムシ *Brachymna tenuis* Stål, 1861 は、日本、中国、台湾、韓国に分布するカメムシ科の一種であり (Aukema & Rieger, 2006; 石川ら, 2012; Ahn et al., 2020), 環境省レッドリストでは準絶滅危惧種に指定されている (環境省, 2020). 日本では石垣島と西表島のみから記録されていたが (石川ら, 2012), 近年になって従来の分布地とはかけ離れた場所で採集されるようになってきている. 2013 年に山口県において確認され (田中, 2013), 以降現在までに、愛知県、大阪府、岡山県、広島県、徳島県、愛媛県、福岡県、大分県で記録されている (金只, 2017; 青野, 2019; 林原, 2021; 小阪, 2021; 上野, 2021; 吉富・安田, 2022; 東・吉富, 2022; 上手ら, 2022; 大野ら, 2022). 国外においても 2020 年に韓国から新たに記録された (Ahn et al., 2020). 本州、四国、九州、および韓国の記録はいず



れも移入と考えられている (Ahn et al., 2020 ; 上野, 2021) .

筆者は熊本県で本種を確認したため, ここに記録する.

なお, 検視標本は九州大学農学部昆虫学教室 (ELKU) に保管されている.

[採集データ]

1ex. (図 1) , 熊本県阿蘇郡西原村小森, 12. VI. 2022 (Hashimoto H. leg.)

末筆ながら, 調査にご同行いただき, 採集個体を提供していただいた山口県の橋本 響氏に厚く御礼申し上げます.

[引用文献]

Ahn, S., Kim, W., Kim, S. & Cho, G. (2020) *Brachymna tenuis* Stål, 1861 (Hemiptera: Pentatomidae), a new invasive bamboo pest in Korea with notes on insects associated with bamboos. *Biodiversity Data Journal*, **8**: e58476.

青野孝昭 (2019) ヒラタトガリカメムシを岡山県倉敷市で確認. しぜんくらしき, (111): 9–10.

Aukema, B., Rieger, C. (2006) *Catalogue of the Heteroptera of the Palaearctic Region. Volume 5. Pentatomomorpha II.* 550 pp. The Netherlands Entomological Society, Ponsen & Looijen, Wageningen.

東 尚登・吉富博之 (2022) 徳島県でヒラタトガリカメムシを確認. ニツチェ・ライフ, (10): 32.

林原毅一郎 (2021) 大阪府茨木市でヒラタトガリカメムシを採集. かめむしニュース, (65): 2.

石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (2012) 日本原色カメムシ図鑑 陸生カメムシ類 第3巻. 573 pp. 全国農村教育協会, 東京.

上手雄貴・横井寛昭・三輪利宏 (2022) 愛知県におけるヒラタトガリカメムシの初記録. 月刊むし, (622): 37–38.

金只遼太郎 (2017) 南方種ヒラタトガリカメムシを採集. 二豊のむし, (55): 106.

環境省 (2020) 【昆虫類】環境省レッドリスト 2020. 環境省レッドリスト 2020: 18–35.

小阪敏和 (2021) ヒラタトガリカメムシを大芝島 (東広島市) で採集. 広島虫の会会報, (60): 34.

大野友豪・伊藤健太郎・澤田宗一郎・戸田尚希 (2022) 愛知県におけるヒラタトガリカメムシの採集記録. 月刊むし, (622): 38–39.

田中 馨 (2013) ヒラタトガリカメムシを山口県で採集. 月刊むし, (514): 3–4.

上野高敏 (2021) 外来種ヒラタトガリカメムシの福岡市への定着を確認. *Pulex*, (100): 908–909.

吉富博之・安田昂平 (2022) ヒラタトガリカメムシ (カメムシ目, カメムシ科) の四国からの記録. 昆虫 (ニューシリーズ) , **25**(3): 124–125.



図 1. ヒラタトガリカメムシ.

## 638 (Meco.: Bittacidae) 福岡県におけるカゴシマガガンボモドキの記録

下岡敏士・女澤央典 (九大・農)

カゴシマガガンボモドキ *Bittacus kagosimaensis* Issiki, 1929 (以下、本種) は、1929年に鹿児島県鹿児島市の城山から得られた 9♂6♀の標本をもとに記載されたシリアゲムシ目ガガンボモドキ科ガガンボモドキ属の昆虫である (Issiki, 1929)。オス後腿節の下面に長い剛毛が叢生し、オス交尾器上付器の後端に指状の突起がある (中村, 2019) などの特徴を持つ。

本種は原記載のほか、2019年に鹿児島市福山町で採集されている (恵, 2020) が、これまで福岡県内での報告はなかった。筆者らは2021年6月7日及び2022年6月24日に福岡県福岡市西区にある九州大学伊都キャンパスの生物多様性保全ゾーンにおいて本種のオス個体を計2個体採集したのでここに報告する。

## [採集データ]

1♂, 福岡県福岡市西区元岡 九州大学伊都キャンパス生物多様性保全ゾーン, 7. VI. 2021, 下岡採集 (弘前大学白神自然環境研究センター所蔵) (図1-3); 1♂, 同上, 24. VI. 2022, 女澤採集 (弘前大学白神自然環境研究センター所蔵)。

2例とも薄暗い湿り気のある木陰の下草から採集された。なお、2021年の個体を採集した際、同時に未同定のガガンボモドキ属のメスも1個体採集したがここでは報告を保留する。

末筆ながら、弘前大学白神自然環境研究センターの中村剛之教授には、同定の確認及び標本の収蔵をしていただき、分布記録をご教示いただいた、また、九州大学農学部井上修吾氏には文献の提供を、九州大学大学院農学研究院の広渡俊哉教授には執筆にあたってご助言をいただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## [引用文献]

Issiki, S. (1929) Descriptions of new Mecoptera from the Japanese Empire. *Transactions of the Natural History Society of Formosa*, **19**(102): 260–314.

中村剛之 (2019) 絵解き検索 シリアゲムシ目の種までの解説. 日本環境動物昆虫学会 (編), 環境アセスメント動物調査手法 29: 1–21. 日本環境動物昆虫学会, 大阪.

恵 海斗 (2020) 鹿児島市で採集したカゴシマガガンボモドキ. *SATSUMA*, (165): 199.



図1-3. 福岡県で採集されたカゴシマガガンボモドキ♂。1, 全体; 2, 交尾器背面; 3, 交尾器側面。

### 639 (Lep.: Ditrysia) 冬季にスギ (ヒノキ科) のビーティングによって得られた小蛾類 後藤聖士郎 (九大院・昆虫\*) \*現在, 熊本農研セ・果樹

成虫で越冬をすると考えられる小蛾類は、ホソガ科、ヒルガオハモグリガ科、ハモグリガ科、ヒラタマルハキバガ科、アカバナキバガ科、ハマキガ科、ニジュウシトリバガ科、トリバガ科など広い分類群で知られている (駒井ら, 2011; 広渡ら, 2013; 那須ら, 2013)。しかし、小蛾類の成虫越冬に関する知見は断片的なものが多く、越冬場所などの詳細な生態が知られていない種も多い。これは、冬季に小蛾類の採集があまり行われなかったことや、越冬時の小蛾類成虫の採集方法が知られていないことが要因の一つと考えられる。

一方、冬季の昆虫採集に有効とされる採集方法の一つにビーティング法が知られている。ビーティング法は植物の枝を棒で叩いて昆虫を落とし、下で構えていた白布や捕虫網で受け止めて採集する方法で (石井, 2002)、冬季は昆虫の活性が低くなるため、越冬中の昆虫の採集にも向くとされる (宮武, 1992)。しかし、ビーティング法はあまり飛翔しない昆虫グループには有効である一方、よく飛翔する蛾類成虫の採集には不向きであると考えられている (宮武, 1992)。

本調査では捕虫網を用いたビーティング法によって冬季に小蛾類成虫が多数採集されたのでここに報告する。

筆者は 2020 年の 12 月 29 日の日中に熊本県山鹿市鹿北町芋生においてビーティング法による採集調査を行った。当日の鹿北町の最高気温は 17.4°C で、12 月としては気温が高く、平均風速は 0.6 m/s と風も少なかったが、日照時間は 2.8h と短く曇天であった (気象庁, 2022)。採集場所は近辺にクリやクヌギ (以上ブナ科)、カキノキ (カキノキ科)、モウソウチク (イネ科) が植栽されたスギの人工林を走る林道で、スギの枝を棒で叩き、落ちてくる小蛾類を捕虫網で受け止め採集した。採集した小蛾類は斑紋や交尾器を含む外部形態を比較することで同定を行った。分類体系は、蛾類は神保 (2021) に、植物は米倉・梶田 (2003) に従った。本調査で得られた標本はすべて九州大学昆虫学教室に所蔵する。

調査の結果、5 科 10 種、計 24 個体の小蛾類が採集された。

#### Gracillariidae ホソガ科

##### 1. ミズナラハマキホソガ *Caloptilia mandshurica* (Christoph, 1882) 2♂ (Fig. 1A)

九州初記録。本種は幼虫がクリ、クヌギ、ミズナラ、イヌブナなどのブナ科を摂食することから (那須ら, 2013)、近隣のクリ、クヌギ林で発生したと思われる。

#### Acrolepiidae アトヒゲコガ科

##### 2. ヨモギハモグリコガ *Digitivalva artemisiella* Moriuti, 1972 6♀ (Fig. 1B)

本種は幼虫がヨモギ (キク科) を摂食し、年数回発生する (広渡ら, 2013)。本調査ではヨモギが生えた道端上部のスギの葉で多数の個体が採集された。

##### 3. ヤマノイモムカゴコガ *Acrolepiopsis japonica* Gaedike, 1982 2♂ (Fig. 1C)

九州初記録。本種は幼虫がオニドコロやヤマノイモ (以上ヤマノイモ科) を利用するリーフマイナーで、秋季にはヤマノイモのむかごにも食入する (広渡ら, 2013)。同じくヤマノイモ科植物を利用する同属のヤマノイモコガ *A. suzukiella* (Matsumura, 1931) は成虫越冬が確認されている (広渡ら, 2013)。



## Chrysopeleiidae コブカザリバガ科

4. ホソバネコブカザリバ *Gisilia tamrae* Sohn & Park, 2018 4♂, 3♀ (Fig. 1D)

本種は平野 (2020) により日本から初めて報告された。 *Gisilia* 属には寄主植物が解明された種は少ないが、寄主植物としてマメ科ネムノキ亜科が知られ、花芽や花に潜り、その内部を摂食する (Sorn & Park, 2018)。コブカザリバガ科ではこれまでに針葉樹を摂食する種は報告されていないことから、本種はスギを越冬場所として利用していると予想される。また、本種は一回のビーティングで多数個体が採集されたことから、集団で成虫越冬すると考えられる。

## Gelechiidae キバガ科

5. ミドリチビキバガ *Aristotelia citricosma* Meyrick, 1906 1♂ (Fig. 1E)

本種の成虫は7-10月に出現し、西表島では3月にも得られている (広渡ら, 2013)。

6. ホソバハイキバガ *Aristotelia* sp. 1♂

本種は一色 (1957) で、ホソバハイキバガ *A. incitata* Meyrick, 1918 として報告されたが、近年は別種であると考えられている。成虫は6-7月、9-10月に得られていて、幼虫の寄主植物は未知である (一色, 1957; 広渡ら, 2013)。

7. ヒメフサキバガ *Dichomeris ferruginosa* Meyrick, 1913 2♀ (Fig. 1F)

本属では、クルミオオフサキバガ *D. christophi* Ponomarenko & Mey, 2002 が成虫越冬をすることで知られ、イッシキオオフサキバガ *D. issikii* (Okada, 1961) やコゲチャオオフサキバガ *D. chinganella* (Christoph, 1882), オオフサキバガ *D. atomogypsa* (Meyrick, 1932) など複数の種で成虫越冬の可能性が示唆されている (広渡ら, 2013)。本種の成虫は5-10月における採集記録があるが、本調査で成虫越冬の可能性が示唆された。本種は国外ではシロゴチョウ (マメ科) が寄主として知られている (広渡ら, 2013)。

## Tortoricidae ハマキガ科

8. ハスオビヒメハマキ *Sorolopha sphaerocopa* (Meyrick, 1930) 1♀ (Fig. 1G)

タブノキ、ヤブニッケイ (以上クスノキ科) やコバンモチ (ホルトノキ科) などを摂食する (那須ら, 2013)。

9. マノヒメハマキ *Olethreutes manoi* (Kawabe, 1987) 1♂ (Fig. 1H)

本種はこれまでに11月中旬に成虫が得られていることから、成虫での越冬が推測されていた (那須ら, 2013)。本調査でも12月下旬に採集されたため、成虫越冬の可能性は高い。寄主植物は本土ではアラカシ (ブナ科) の記録がある (那須ら, 2013)。

10. スキバヒメハマキ *Grapholita hyalitis* (Meyrick, 1909) 1♂ (Fig. 1I)

本種の成虫は5-6月、10-11月に出現するとされているが、本調査により12月下旬にも得られたことから、成虫で越冬しているものと思われる。寄主植物はナカハラクロキ (ハイノキ科) が記録されている (那須ら, 2013)。

本調査では、冬季のビーティング法により小蛾類の成虫が多数採集された。そのため、蛾類の成虫の採集には不向きとされているビーティング法も、成虫の活性が鈍る冬季には有

効であると考えられる。また、本調査で採集された小蛾類のうち、スギが寄主植物として知られる種はなく、これらは越冬場所としてスギの枝葉を利用していたと考えられる。スギは常緑針葉樹であり、冬季にも小蛾類が越冬できる十分な空間が葉の間にある、適した越冬場所であると推測される。今後は常緑針葉樹の葉だけでなく、常緑広葉樹の葉や枯凋性の落葉広葉樹上の枯葉といった様々な自然物を叩いて採集を行うことで、小蛾類の成虫越冬に関する知見が得られると期待される。

本調査、執筆に当たって、九州大学昆虫学教室の屋宜禎央博士、奥尉平博士、鈴木信也氏にご協力いただいたのでここで御礼申し上げる。

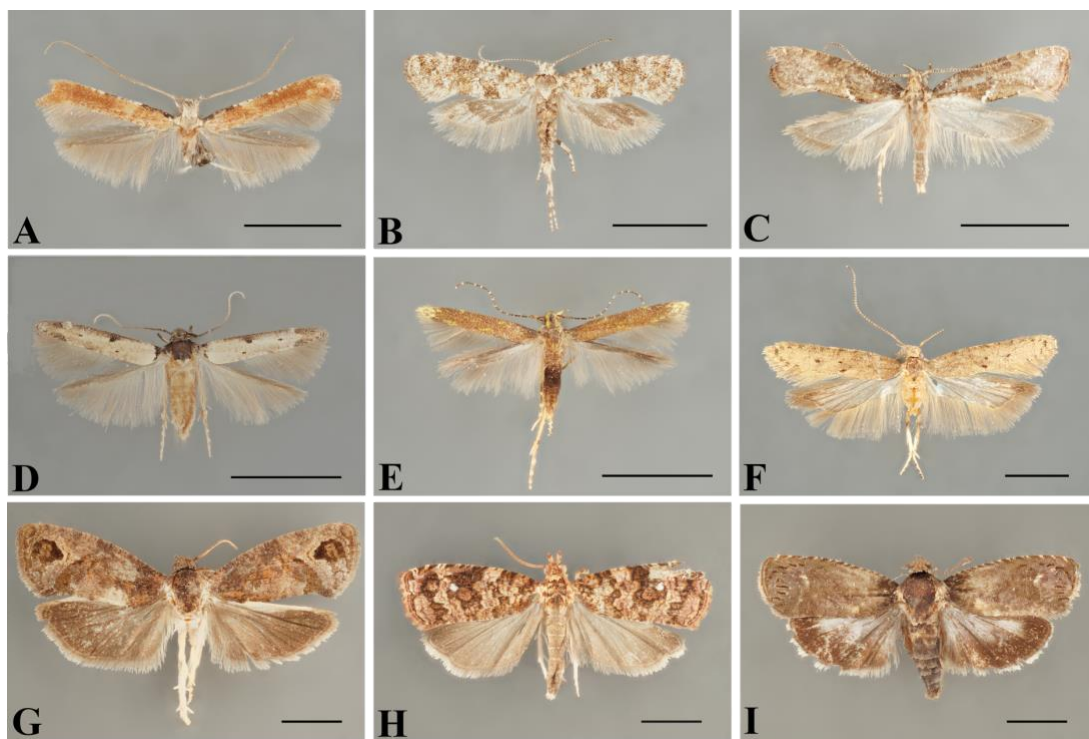


図1. A, ミズナラハマキホソガ; B, ヨモギハモグリコガ; C, ヤマノイモムカゴコガ; D, ホソバネコブカザリバ; E, ミドリチビキバガ; F, ヒメフサキバガ; G, ハスオビヒメハマキ; H, マノヒメハマキ; I, スキバヒメハマキ. スケール: 3 mm.

[引用文献]

- 平野長男 (2020) 日本未記録の *Chrysopeliidae* コブカザリバガ科の 2 種について. 蛾類通信, (294): 486-491.
- 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則 (編) (2013) 日本産蛾類標準図鑑 III. 360 pp. 学研教育出版, 東京.
- 石井 実 (2002) 農業土木技術者のための生き物調査 (その4) —陸生昆虫の調査法—. 農業土木学会誌, **70**(12): 1147-1152.
- 一色周知 (1957) きばが科 *Gelechiidae*. 江崎悌三・六浦 晃・一色周知・井上 寛・緒方正美・岡垣 弘 (共著) 原色日本蛾類図鑑 (上): 39-47. 保育社, 大阪.
- 神保宇嗣 (2021) List-MJ 日本産蛾類総目録 [version 3] ( $\beta$  バージョン). <http://listmj.mothprog.com/> (2021年9月17日閲覧)
- 気象庁 (2022) 各種データ・資料. 過去のデータ検索. 日ごとの値. [https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily\\_a1.php?prec\\_no=86&block\\_no=0832&y](https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_a1.php?prec_no=86&block_no=0832&y)

- ar=2020&month=12&day=29&view= (2022年12月13日閲覧)
- 駒井古実・吉安 裕・那須義次・斎藤寿久(編) (2011) 日本の鱗翅類—系統と多様性. 1308 pp. 東海大学出版会, 神奈川.
- 宮武頼夫(1992) 昆虫相調査の手法と調査結果の検討について. 日本環境動物昆虫学会誌, 4(2): 91-99.
- 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編) (2013) 日本産蛾類標準図鑑 IV. 552 pp. 学研教育出版, 東京.
- Sorn, J.C. & Park, K.T. (2018) Two new species of *Gisilia* Kasy, 1968 (Lepidoptera, Cosmopterigidae) from Korea with first report of piercing oviscapt in Gelechioidea. *Zootaxa*, 4418(2): 179-186.
- 米倉浩司・梶田 忠(2003) [BG Plants 植物和名—学名インデックス] (YList). <http://ylist.info> (2021年9月17日閲覧)

#### 6 4 0 (Lep. Glyphipterigidae) *Chrysorthenches muraseae* の九州からの記録

後藤聖士郎(熊本農研セ・果樹)・屋宜禎央(九大院・農・昆虫)

*Chrysorthenches muraseae* Sohn & Kobayashi, 2020 (以下, 本種) はホソハマキモドキガ科の Orthoteliinae 亜科に属する開張 11 mm 前後の小蛾類で, 頭部と胸部は暗い黄緑色, 前翅は翅頂のとがるやや幅広い広線形で, 中央部は褐色, 前翅前縁 1/3 と後縁は黄緑色, 前縁に黒と白に縁どられる灰色の線模様を有し, 縁毛は黄み掛かる美しい種である (Sohn et al., 2020). 幼虫はマキ科のイヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Sweet. の新芽を綴って作られた巣の中に生息することが知られている. 本種はこれまでに本州と四国での分布が知られ, 九州からの記録はなかったが, 2022 年の 5-6 月に, 筆者の一人である後藤が熊本県宇城市にある熊本県農業研究センター果樹研究所内に防風樹として植樹されたイヌマキの葉から成虫ならびに幼虫を採集した (図 1A-D). さらに, 筆者の一人である屋宜が同県南阿蘇村においてもライトトラップで成虫を採集したのでここに報告する. 採集された個体は九州大学農学部昆虫学教室に収蔵予定である.

#### [採集データ]

1♀, 熊本県宇城市松橋町豊福 (Kumamoto-Pref., Uki-city, Matsubase-town, Toyofuku), 26. V. 2022, K. GOTO leg., Host: Young shoot of *Podocarpus macrophyllus*, 12. VI. 2022 em.; 1♂, 同所, 26. V. 2022, K. GOTO leg., Host: Young shoot of *Podocarpus macrophyllus*, 22. VI. 2022 em.; 1♀, 同所, 7. VI. 2022, K. GOTO leg.; 1♂1♀, 同所, 8. VI. 2022, K. GOTO leg.; 1♀, 同所, 15. VI. 2022, K. GOTO leg.; 1♀, 熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陰地蔵峠 (Kumamoto-Pref., Aso-gun, Minamiaso-mura, Kain, Jizo-toge), 2. VII. 2022, S. YAGI leg.

*Chrysorthenches* 属は, 寄主植物であるマキ属 *Podocarpus* の分散の後, 起源であるオーストラリア地域から環太平洋地域を中心に分散し, 各地で種分化したと考えられており, タイとオーストラリアにはマキ属植物を利用すると考えられる本種の近縁種がそれぞれ分布している (Sohn et al., 2020). 示唆されている分散の経路から, 本種は琉球列島にも分布する可能性が高く, 今後の調査による分布域の解明が期待される.

末筆ながら, 本種の採集や執筆にあたりお世話になった熊本県農業研究センター果樹研究所のスタッフの方々, 九州大学昆虫学教室のスタッフの方々に厚く御礼申し上げる.

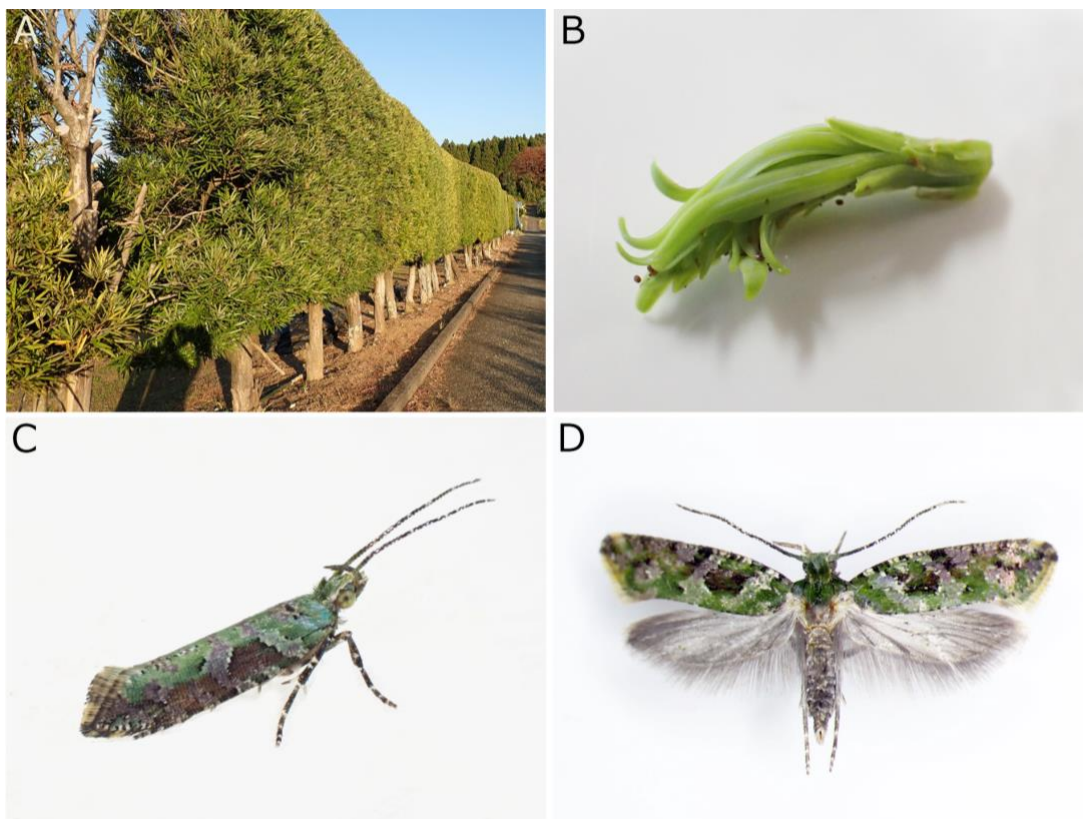


図1. *C. muraseae* の採集地と寄主植物，採集された成虫。A，幼虫と成虫が確認されたイヌマキ植栽；B，イヌマキ新梢に作られた巣；C，D，*C. muraseae* 成虫。

[引用文献]

Sohn, J.C., Kobayashi, S. & Yoshiyasu, Y. (2020) Beyond Wallace: a new lineage of *Chrysorthenches* (Lepidoptera: Yponomeutoidea: Glyphipterigidae) reveals a journey tracking its host-plants, *Podocarpus* (Pinopsida: Podocarpaceae). *Zoological Journal of the Linnean Society*, **190**: 709–739.

6 4 1 (Lep.: Plutellidae) クサビモンコガの九州からの記録

屋宜禎央 (九大院・農・昆虫)

クサビモンコガ *Anthonympha rossica* Ponomarenko, 2015 は極東ロシアの標本を元に記載されたコナガ科の一種である。本種は奥(2003)によってホソハマキモドキガ科の一種 *Glyphipterix* sp. 2 として記録された後，2018年に初めて種名が確定した(奥，2003；Ponomarenko, 2015；梅津，2018)。筆者は熊本県において，九州から記録のなかったクサビモンコガを採集したため，ここに報告する。標本は九州大学農学部昆虫学教室



図1. クサビモンコガ。スケール：4 mm.

に所蔵されている。

[採集データ]

1♀, 熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陰地蔵峠 (Kumamoto-Pref., Aso-gun, Minamiaso-mura, Kain, Jizotoge), 2. VII. 2022, 筆者採集 (図 1)。

本種が採集された地点はブナやミズナラ等が自生する冷温帯林で, ライトトラップに飛来した個体を採集した。幼虫の寄主植物など生態は未だよく分かっていない。

[引用文献]

奥 俊夫 (2003) 岩手県の小蛾類. 岩手蟲乃會會報特別号, (2): 1-157.

Ponomarenko, M.G. (2015) A new species of *Anthonympha* Moriuti (Lepidoptera: Plutellidae) from Russian Far East, with annotated check list of the genus. *Zootaxa*, **4057**(3): 430-436.

梅津一史 (2018) 日本未記録の *Anthonympha rossica* Ponomarenko, 2015 (コナガ科) について. 蛾類通信, (286): 272-273.

**6 4 2 (Col.: Curculionidae) 初記録種を含むトカラ列島悪石島産ゾウムシ科甲虫目録**

今田舜介 (九大院・生資環・昆虫; 九大博) ・辻 尚道 (九大博)

トカラ列島悪石島のゾウムシ科甲虫の記録は, 琉球列島産昆虫目録までに 14 種が知られ (佐々木ら, 2002), その後, 21 種が追加された (Kojima & Fujisawa, 2015; Kojima et al., 2016; 金井ら, 2019; 今田・名嘉, 2021)。第一著者の今田は 2019 年 7 月 2~6 日の期間に悪石島において調査を実施し, 若干のゾウムシ科甲虫を得た。種同定が済んだものの中に, 悪石島未記録種を 6 種確認したので, それらを含めて, 今日までに悪石島から記録された計 39 種のゾウムシ科甲虫の目録をここに報告する。なお, 標本は九州大学総合研究博物館に保管する予定である。

報告に先立ち, 悪石島における調査にご協力いただいた名嘉猛留氏ならびに紙谷聡志博士, また, 調査許可をいただいた十島村役場にお礼を申し上げる。

悪石島産ゾウムシ科甲虫目録

1. セグロツブゾウムシ *Sphinxis ihai* (Chûjô & Voss, 1960)  
文献記録: 佐々木ら (2002)
2. オオクマハナゾウムシ *Anthonomus (Anthonomus) okumai* Morimoto & Miyawaki, 1985  
文献記録: Kojima & Fujisawa (2015)
3. リュウキュウハナゾウムシ *Anthonomus (Anthonomus) ryukyuensis* Kojima & Morimoto, 1994  
文献記録: 佐々木ら (2002)
4. ウエノハナゾウムシ *Anthonomus (Anthonomus) uenoi* Kojima & Morimoto, 1994  
文献記録: 佐々木ら (2002)
5. イヌビワシギゾウムシ *Curculio (Curculio) funebris* (Roelofs, 1875)  
文献記録: Kojima et al. (2016)
6. ヒラシマシギゾウムシ *Indocurculio hirashimai* (Morimoto, 1981)  
文献記録: Kojima & Fujisawa (2015)
7. モンアシブトゾウムシ *Ochyromera japonica* (Roelofs, 1875)  
文献記録: 佐々木ら (2002)

8. ナガクチブトノミゾウムシ *Imachra maetai* (Morimoto, 1964)  
文献記録：Kojima et al. (2016)
9. エノキノミゾウムシ *Orchestes (Orchestes) horii* (Kôno, 1937)  
文献記録：佐々木ら (2002)
10. マルムネチビクチブトゾウムシ *Viticis aeratus* (Morimoto, 1983)  
文献記録：Kojima & Fujisawa (2015)
11. キボシヒメゾウムシ基亜種 *Anthinobaris kiboshi kiboshi* (Nakane, 1963)  
文献記録：今田・名嘉 (2019)
12. ツツジトゲムネサルゾウムシ *Coelioderes fulvus* (Roelofs, 1875)  
文献記録：Kojima & Fujisawa (2015)
13. チャバネキクイゾウムシ *Kojimazo lewisii* (Wollaston, 1873)  
文献記録：Kojima et al. (2016)
14. メダカケブカクイゾウムシ *Pholidoforus squamosus* Wollaston, 1873  
文献記録：Kojima et al. (2016)
15. カグヤヒメキクイゾウムシ *Pseudocossonus brevitarsis* Wollaston, 1873  
文献記録：Kojima et al. (2016)
16. マツクチブトキクイゾウムシ *Stenoscelis (Stenoscelis) gracilitarsis* Wollaston, 1873  
文献記録：Kojima et al. (2016)
17. マツオオキクイゾウムシ *Macrorhyncolus crassiusculus* Wollaston, 1873  
文献記録：Kojima et al. (2016)
18. タイワンモンクチカクシゾウムシ *Sclerolips horridus* Heller, 1931  
文献記録：佐々木ら (2002)
19. ニセマツノシラホシゾウムシ *Shirahoshizo rufescens* (Roelofs, 1875)  
文献記録：佐々木ら (2002)
20. ヒサゴクチカクシゾウムシ *Simulatacalles simulator* (Roelofs, 1875)  
1 ex., 金山神社；1 ex., 坂森神社；4 exs., 上集落；3 exs., 湯泊温泉付近. 悪石島初記録.
21. ムナビロマルクチカクシゾウムシ *Orochlesis amplicollis* Morimoto & Miyakawa, 1985  
文献記録：佐々木ら (2002)；Tsuiji & Yoshitake (2020)  
備考：佐々木ら (2002) にはメシママルクチカクシゾウムシ *O. meshimensis* Kôno, 1937 (現在はタカオマルクチカクシゾウムシ *O. takaosanus* Kôno, 1932 のシノニム) も掲載されているが、この記録は分布からみてサイカイマルクチカクシゾウムシ *O. simulata* またはムナビロマルクチカクシゾウムシ *O. amplicollis* の誤同定であると考えられている (Tsuiji & Yoshitake, 2020). 証拠標本が未検討であるものの、上記の理由により、今回のリストからは除外した.
22. モモビロヤサクチカクシゾウムシ *Parempleurus femoratus* Morimoto & Miyakawa, 1985  
文献記録：Kojima & Fujisawa (2015)
23. ヤサイゾウムシ *Listroderes costirostris* Schoenherr, 1826  
文献記録：Kojima et al. (2016)
24. サカグチクチブトゾウムシ *Oedophrys sakaguchii* (Kôno, 1930)  
文献記録：金井ら (2019)
25. オキナワクワゾウムシ *Episomus mori* Kôno, 1928  
文献記録：佐々木ら (2002)

26. ワモンヒョウタンゾウムシ屋久島亜種 *Sympiezomias lewisi albidus* Nakamura & Morimoto, 2015  
8 exs., 上集落. 悪石島初記録.  
備考: 金井ら (2019) により, 悪石島から同属のホソヒョウタンゾウムシ *S. cribricollis* Kôno, 1930 が記録されている. しかしながら, 吉武 (2022) によると, トカラ列島以北の記録は本種の誤同定であり, この記録も本種の誤同定によるものと思われる. 証拠標本が未検討であるものの, 上記の理由により, 今回のリストからは除外した.
27. ヒラヤマメナガゾウムシ *Aclees (Aclees) hirayamai* Kôno, 1933  
文献記録: 佐々木ら (2002)
28. シロアナアキゾウムシ *Hesychobius vossi* (Chûjô, 1959)  
文献記録: 金井ら (2019)
29. クスアナアキゾウムシ *Pimelocerus hylobioides* (Desbrochers des Logas, 1891)  
2 exs., 金山神社. 悪石島初記録.
30. コササラクチカクシゾウムシ *Colobodellus postfasciatus* Morimoto & Miyakawa, 1985  
文献記録: Kojima et al. (2016)
31. ネジキトゲトゲゾウムシ *Colobodes ornatoideus* Morimoto, 1988  
文献記録: 佐々木ら (2002)
32. マルムネトゲトゲゾウムシ *Colobodes rotundicollis* Morimoto, 1988  
文献記録: Kojima et al. (2016)
33. ダルマクチカクシゾウムシ *Darumazo distinctus* Morimoto & Miyakawa, 1985  
文献記録: 佐々木ら (2002)
34. クロアシナガゾウムシ *Cylindralcides (Cylindralcides) takahashii* (Kôno, 1930)  
1 ex., 上集落. 悪石島初記録.
35. マサタカアシナガゾウムシ *Neomecyslobus (Nipponomerus) masataakai* Morimoto & Kojima, 2007  
文献記録: Kojima & Fujisawa (2015)
36. クワノコブコブゾウムシ *Styanax kuwanoi* Chûjô & Voss, 1960  
文献記録: Kojima & Fujisawa (2015)
37. マダラカレキゾウムシ *Acicnemis maculaalba* Roelofs, 1875  
文献記録: 佐々木ら (2002)
38. セグロカレキゾウムシ *Acicnemis postica* Hubenthal, 1917  
1 ex., 金山神社; 1 ex., 坂森神社; 1 ex., 湯泊温泉付近. 悪石島初記録.
39. ザウターカレキゾウムシ *Acicnemis sauteri* Hubenthal, 1917  
1 ex., 坂森神社. 悪石島初記録.

[引用文献]

- 今田舜介・名嘉猛留 (2021) トカラ列島悪石島におけるキボシヒメゾウムシ基亜種の採集例. さやばねニューシリーズ, (43): 15.
- 金井賢一・守山泰司・小宮裕生 (2019) トカラ列島口之島・悪石島の昆虫 (2018年). 鹿児島県立博物館研究報告, (38): 1-10.
- Kojima, H. & Fujisawa, Y. (2015) Biological and distributional notes on weevils (Coleoptera, Curculionoidea) from the Tokara Islands, the Ryukyus, Southwestern Japan. *Elytra, Tokyo* (n. ser.), **5**: 515-524.



Kojima, H., Fujisawa, Y. & Yoshitake, H. (2016) Weevils (Coleoptera, Curculionoidea) new to the fauna of the Tokara Islands, the Ryukyus, Southwestern Japan. *Elytra, Tokyo* (n. ser.), **6**: 219–223.

佐々木健志・木村正明・河村 太 (2002) コウチュウ目. 東 清二 (監修)・屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱継雄・佐々木健志・木村正明・河村 太 (編) 琉球列島産昆虫目録: 159–284. 沖縄生物学会, 沖縄.

Tsuji, N. & Yoshitake, H. (2020) A taxonomic study of the Gasterocercini genus *Orochlesis* Pascoe (Coleoptera, Curculionidae, Cryptorhynchinae) in Japan. *Elytra, Tokyo* (n. ser.), **10**: 65–103.

吉武 啓 (2022) ゾウムシ科. 松村雅史 (編著)・楠井善久・小浜継雄・佐々木健志・青柳克・吉武 啓, 沖縄甲虫図鑑: 256–269, pls. 89–95. 沖縄時事出版, 沖縄.

**6 4 3 (Col.: Curculionidae) ザウターカレキゾウムシのトカラ列島における追加記録  
および奄美群島における分布記録**  
辻 尚道 (九大博)・今田舜介 (九大院・生資環・昆虫; 九大博)・  
小野広樹 (神奈川県相模原市)

ザウターカレキゾウムシ *Acicnemis sauteri* Hubenthal, 1917 (以下, 本種) は台湾の個体を基に記載されたアナアキゾウムシ亜科カレキゾウムシ族に属するゾウムシである. 国内産種ではマダラカレキゾウムシ *A. maculaalba* Roelofs, 1875 やニセマダラカレキゾウムシ *A. lueomaculata* Morimoto & Miyakawa, 1995, ナカグロカレキゾウムシ *A. kiotoensis* Nakane, 1963 とよく似ているが, これらの種とは, 本種について, 上翅中央後方の白紋後縁が横に直線状とならないことや (図 1A), 触角中間第 2 節は細長く, 第 1 節の 1.6 倍程度および第 3 節の 1.4~1.5 倍の長さもつこと, 球桿部基部がくびれること (図 1B), さらに前脛節が中央付近で内側に張り出すといった特徴を併せ持つことで識別される (Morimoto & Miyakawa, 1995). 本種はこれまでに台湾のほか日本と韓国から記録されているが (Morimoto & Miyakawa, 1995; 小島・森本, 2004; Alonso-Zarazaga et al., 2017), 日本国内の分布記録はトカラ列島中之島で採集された 1 雌のみにより記録された後 (Morimoto & Miyakawa, 1995), 愛知県豊田市における記録があるのみであり (井上・伊澤, 2020), その後の記録はないと考えられる. 筆者らはトカラ列島において本種成虫を複数頭採集しており, さらに九州大学総合研究博物館に所蔵されている本種の喜界島および奄美大島産の標本を検しているため, 本種の国内における追加の分布記録としてここに報告する.

[トカラ列島] 2 males and 8 exs., 鹿児島県鹿児島郡十島村中之島里村, 7–9. VII. 2019, 辻・今田・小野採集; 1 ex., 鹿児島県鹿児島郡十島村悪石島坂森神社, 2–9. VII. 2019, 今田採集 (今田・辻 (2022) と同じ個体) [喜界島] 1 male, 鹿児島県大島郡喜界町百之台, 4. III. 2012, 青木淳一採集; [奄美大島] 1 male, 鹿児島県奄美市住用, 27. V. 2004, 高橋敬一採集.

トカラ中之島では, 園地内にある樹種不明の倒木においてまとまった数が観察され, その倒木下面でマウント行動をしているペアを観察することができた.

なお, 今回本種の個体を多数観察できたことで, 先行研究 (Morimoto & Miyakawa, 1995) で本種とマダラカレキゾウムシの識別点として認識できる後腿節基部の中肋には個体変異があり, 本種においても個体によっては多少とも発達することが判明した. 本種とマダラカレキゾウムシは上翅の斑紋および触角中間第 1, 2 節の長さの比で未だに識別可能であるが, 本報告で本種と同定した個体のうち, 喜界島および奄美大島より得られている個体はトカ



ラ列島産の個体と比べるとやや小型で上翅後方の白紋がより広がっており (図 1C) , その点においてマダラカレキゾウムシと本種のトカラ列島産個体群との中間的な特徴をもつため、今後両種の雄生殖器官の比較も含めた詳細な検討が必要である。

末筆ではあるが、十島村における筆者らの昆虫調査については十島村役場に、九州大学総合研究博物館コレクション中の標本調査は故・森本桂博士と丸山宗利博士にそれぞれご許可・ご協力を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

[引用文献]

Alonso-Zarazaga, M.A., Barrios, H., Borovec, R., Bouchard, P., Caldara, R., Colonnelli, E., Gültekin, L., Hlaváč, P., Korotyaev, B., Lyal, C.H.C., Machado, A., Meregalli, M., Pierotti, H., Ren, L., Sánchez-Ruiz, M., Sforzi, A., Silfverberg, H., Skuhrovec, J., Trýzna, M., Velázquez de Castro, A.J. & Yunakov, N.N. (2017) *Cooperative Catalogue of Palaearctic Coleoptera Curculionoidea* [online]. Monografías Electrónicas S. E. A., 8. 729 pp. Sociedad Entomológica Aragonesa, Zaragoza. Available from:

[http://sea-entomologia.org/PDF/MeSEA\\_8\\_Catalogue\\_Palaeartic\\_Curculionoidea.pdf](http://sea-entomologia.org/PDF/MeSEA_8_Catalogue_Palaeartic_Curculionoidea.pdf)

井上晶次・伊澤和義 (2020) 地域の甲虫自然史第 5 号「愛知県のゾウムシ類 Weevils of Aichi Prefecture」追加と訂正. さやばねニューシリーズ, (40): 33–35.

今田舜介・辻 尚道 (2022) (Col.: Curculionidae) 初記録種を含むトカラ列島悪石島産ゾウムシ科甲虫目録. *Pulex*, (101): 948–951.

小島弘昭・森本 桂 (2004) 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. 九州大学総合研究博物館研究報告, (2): 33–147.

Morimoto, K. & Miyakawa, S. (1995) The family Curculionidae of Japan. VIII. Subfamily Acicnemidinae. *Esakia*, (35): 17–62.

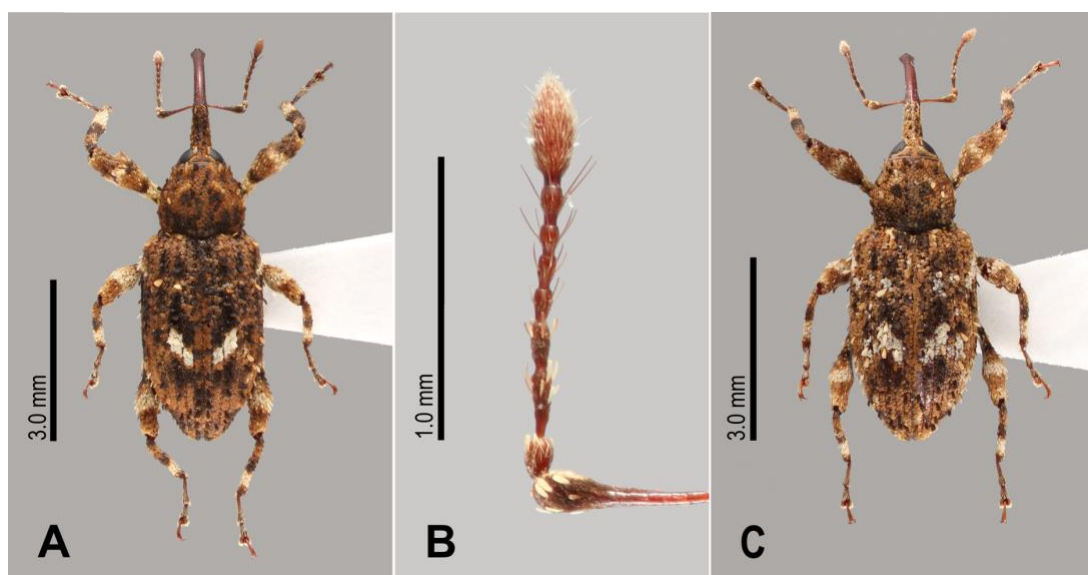


図 1. ザウターカレキゾウムシ. A, 中之島産, 背面; B, 同, 左触角中間節と球桿部; C, 喜界島産, 背面.

6 4 4 (Col.: Staphylinidae) 八重山諸島におけるウシオハネカクシ属 2 種の記録  
橋爪拓斗・野崎 翼・今田舜介 (九大院・生資環・昆虫)

ウシオハネカクシ属 *Heterota* はヒゲブトハネカクシ亜科に属し、海岸性として知られる。八重山諸島からは Maruyama (2011) によりサンゴウシオハネカクシ *Heterota arenaria* Cameron, 1920 の 1 種が石垣島から記録されているのみであった。筆者らは八重山諸島の黒島と西表島で得られた本属の標本を確認したので報告する。標本は九州大学総合研究博物館に保管されている。



図 1. サンゴウシオハネカクシ。

[採集データ]

サンゴウシオハネカクシ

*Heterota arenaria* Cameron, 1920

2 exs., 沖縄県竹富町西表島南風見, 23–25. X. 2020, 野崎採集; 18 exs., 沖縄県竹富町西表島南風見, 24. X. 2020, 野崎採集 (図 1)。

西表島からは初記録となる。

キアシウシオハネカクシ *Heterota sunjaei* Park & Ahn, 2008

1 ♀, 沖縄県竹富町黒島, 28. V. 2022, 今田採集。

本種は Park & Ahn (2008) により韓国から記載され、日本では Maruyama (2011) により本州から記録された。南西諸島からは初記録となる。

末筆ながら、研究施設の利用に便宜を図っていただいた琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設及び職員の皆様、本稿の作成にあたりお世話になった丸山宗利博士に厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

Maruyama, M. (2011) New record of the genus *Heterota* (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from Japan, with description of a new species. *ESAKIA*, (50): 97–104.

Park, J.-S., Jeon, J.-M. & Ahn, K.-J. (2008) Description of *Heterota sunjaei* sp. nov. from Korean seashores and an annotated catalog of the littoral genus *Heterota* (Coleoptera: Staphylinidae: Aleocharinae). *Canadian Entomologist*, **140**: 111–118.

6 4 5 (Col.: Staphylinidae) 長崎県五島列島初記録のハネカクシ科甲虫 8 種

橋爪拓斗・佐藤勇哉 (九大院・生資環・昆虫) ・丸山宗利 (九大博)

筆者ら (橋爪と佐藤) は 2022 年 10 月に五島列島福江島でハネカクシの採集を行った。福江島は長崎県西部に位置する五島列島を形成する島の 1 つであり、ハネカクシ科甲虫は今までに福江島から 19 種、五島列島全体では 53 種が記録されている (種名未確定のものを

除く) (藤原ら, 2009 ; Naomi, 2012 ; Senda & Ogawa, 2018 ; 野村, 2020 ; 野村, 2022) . 筆者らは福江島初記録となるハネカクシを複数採集したため報告する. いずれの種も五島列島初記録となる. 標本は採集者がそれぞれ保管している.

[採集データ]

ヒゲブトハネカクシ亜科 Aleocharinae

ザウターカレキハネカクシ *Homalota sauteri* Bernhauer, 1907

1 ex., 五島市岐宿町中嶽, 11. X. 2022, 橋爪採集.

チョウセンナギサハネカクシ *Bryothinusa koreana* Ahn & Jeon, 2004

1 ex., 五島市三井楽町濱ノ畔, 11. X. 2022, 橋爪採集.

クロナギサハネカクシ *Bryothinusa nigra* Liu, Ono & Maruyama, 2021

2 exs., 五島市三井楽町濱ノ畔, 11. X. 2022, 橋爪採集.

デオキノコムシ亜科 Scaphidiinae

アカミケシデオキノコムシ *Scaphisoma rubrum* Reitter, 1877 (図 1, 2)

1 ex., 五島市岐宿町中嶽, 11. X. 2022, 橋爪採集.

コケムシ亜科 Scydmaeninae

カスガコケムシ *Scydmaenus kasuganus* Franz, 1976 (図 3, 4)

5 exs., 五島市岐宿町中嶽, 11. X. 2022, 橋爪採集.

本州 (奈良県, 福井県) のみから知られていた (Franz, 1976 ; Jałoszyński, 2022) .

チビフトハネカクシ亜科 Euaesthetinae

サガスジツヤチビハネカクシ *Edaphus perpropinquus* Puthz, 2014 (図 5, 6)

1 ex., 五島市玉之浦町荒川, 10. X. 2022, 橋爪採集.



図 1-2. アカミケシデオキノコムシ. 1, 背面 ; 2, 雄交尾器.

アリガタハネカクシ亜科 Paederinae

クビナガハネカクシ *Procirrus lewisii* Sharp, 1889

1 ex., 五島市岐宿町中嶽, 11. X. 2022, 佐藤採集.

ハネカクシ亜科 Staphylininae

シャープホソコガシラハネカクシ *Gabrius sharpianus* (Cameron, 1930)

1 ex., 五島市岐宿町中嶽, 10. X. 2022, 橋爪採集.

ハネカクシ科甲虫は福江島から 27 種, 五島列島全体では 61 種記録されたことになる.  
本報告の一部は科研費 JP19H03285 の助成を受けて行われた.

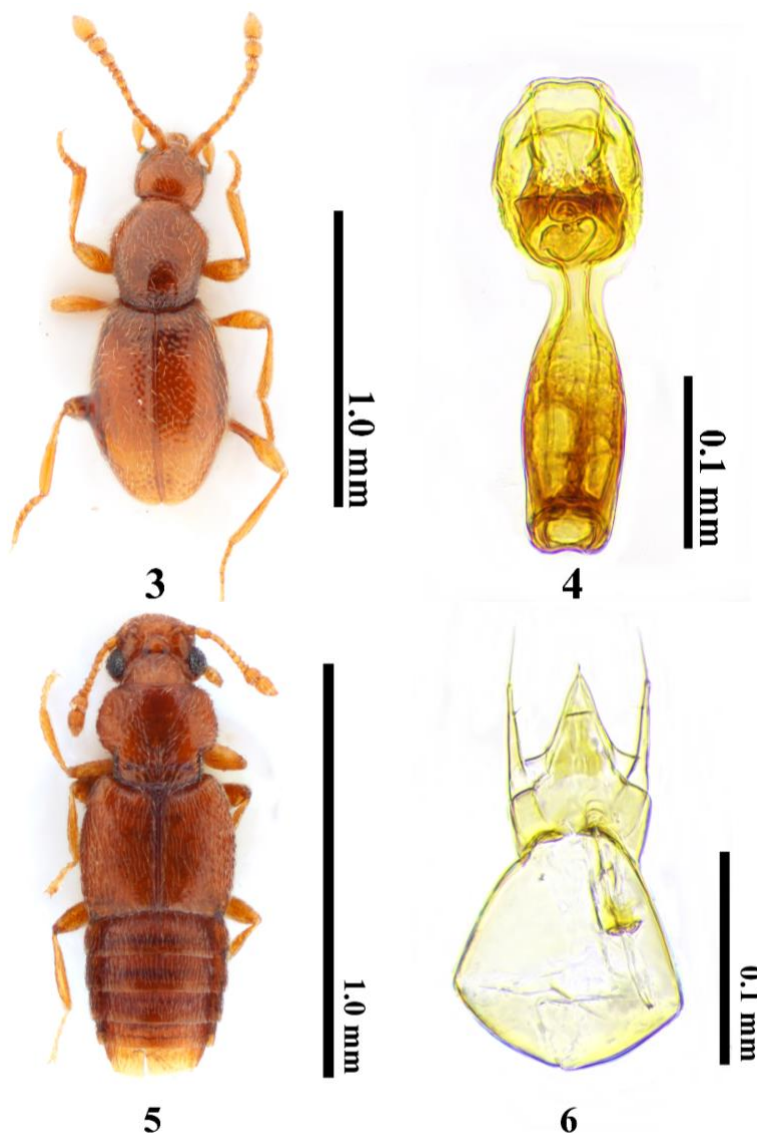


図 3-6. 3-4, カスガコケムシ; 5-6, サガスジツヤチビハネカクシ. 3, 5, 背面; 4, 6, 雄交尾器.

[引用文献]

Frantz, H. (1976) Neue Scydmaeniden aus Japan, sowie Bemerkungen zu bekannten Arten. Entomologische Ergebnisse einer auf Einladung der Internationalen Vereinigung für Vegetationskunde nach Japan durchgeführten Forschungsreise. *Entomologische Blätter für Biologie und Systematik der Käfer*, **72**(1): 51-60.

- 藤原淳一・河上康子・沼田京子 (2009) 五島列島で採集した海岸性甲虫類の記録. 甲虫ニュース, (168): 5–8.
- Jałoszyński, P. (2022) Rediscovery and re(re)description of *Scydmaenus kasganus* Franz, the only Japanese species of the subgenus *Mascarensia* Franz (Coleoptera, Staphylinidae, Scydmaeninae). *Zootaxa*, **5093**(1): 38–48.
- Naomi, S.-I. (2012). Taxonomic revision of the genus *Stenus* Latreille, 1797 (Coleoptera, Staphylinidae, Steninae) of Japan: Species group of *S. cephalotes* Sharp (Part 1). *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **18**(2): 269–318.
- 野村周平 (2020) 長崎県五島列島福江島のアリヅカムシ採集記. ハネカクシ談話会ニュース, (48): 19–27.
- 野村周平 (2022) キタナガアリヅカムシ (コウチュウ目, ハネカクシ科) の九州および五島列島からの初記録. 昆虫 (ニューシリーズ), **25**(2): 70–71.
- Senda, Y. & Ogawa, R. (2018) A list of staphylinid beetles from the Gotô Islands, with new records of two species from Fukue-jima Island (Coleoptera, Staphylinidae). *Elytra, Tokyo, New Series*, **8**(2): 391–393.

**6 4 6 (Dip.: Cecidomyiidae) スダジイタマバエの奄美大島と徳之島における採集記録**  
 小高信彦 (森林総研九州) ・宗 祥史 (佐賀大院・農) ・  
 Ayman Khamis Elsayed ・徳田 誠 (佐賀大・農)

スダジイタマバエ *Schizomyia castanopsisae* Elsayed and Tokuda (ハエ目: タマバエ科) は、ブナ科のスダジイの花序 (果序) に虫えい「スダジイハナエダフクレフシ」を形成する (湯川・榎田, 1996 ; Tokuda et al., 2013 ; Elsayed et al., 2018) . 本種による虫えいは、伊豆諸島 (Tokuda et al., 2012, 2013 ; Tokuda & Kawauchi, 2013 ; 徳田, 2014 ; Tokuda et al., 2015) , 九州 (福岡・宮崎・鹿児島) (永井, 2010 ; 徳田・川内, 2013 ; Tokuda et al., 2019) , 種子島 (湯川ら, 2013) , 沖縄島 (山内ら, 1982 ; Tokuda et al., 2022) から報告されている. このうち、伊豆諸島南部では 2000 年代前半頃から本種が大発生してスダジイの種子生産がほとんど見られない状態が続いている (徳田, 2014 ; Tokuda et al., 2022) .

筆者らは、中琉球におけるスダジイの結実状況調査の過程 (高嶋ら, 2021 ; 中琉球どんぐりパンフレット編集委員会, 2022) で、奄美大島と徳之島で本種による虫えいを初めて確認した. 採集した虫えいの解剖結果も含めてここに報告する.

今回得られたタマバエ幼虫の標本は、佐賀大学農学部・システム生態学研究室に保管されている. 報告に際し、調査にご協力いただいた NPO 法人徳之島虹の会および NPO 法人奄美野鳥の会、環境省徳之島管理官事務所・奄美野生生物保護センター、林野庁鹿児島森林管理署名瀬森林事務所・徳之島森林事務所、天城町、瀬戸内町、奄美市の皆様に感謝申し上げます.

[採集および解剖データ]

いずれの記録も採集者は小高信彦, 同定者は徳田誠であり, 2022 年 8 月採集 (同年同月解剖) の虫えいの解剖者は Ayman Khamis Elsayed, 2022 年 10 月採集の虫えい (同年 10 月 29 日解剖) の解剖者は宗祥史である.

・奄美大島 (新分布記録)

大島郡瀬戸内町油井岳, 5.VIII.2022, 1 齢幼虫複数頭 (虫えいは木質化しておらず) ; 大島郡瀬戸内町網野子, 10.VIII.2022, 1 齢幼虫複数頭 (虫えいは木質化しておらず, 1 頭の幼虫



から外部捕食寄生蜂の幼虫が確認) ; 奄美市名瀬大字朝仁(図1), 21.X.2022, 若齢幼虫(虫えい [Nos. 1-3, 長さ/幅 mm : No.1, 6.45/6.00; No.2, 6.57/5.85; No.3, 10.46/8.24] を解剖, 若齢幼虫がそれぞれ2頭, 2頭, 5頭存在, 虫えいは木質化) ; 奄美市名瀬金久, 21.X.2022, 若齢幼虫(虫えい [長さ/幅 mm : 5.72/4.43] を解剖, 若齢幼虫が2頭存在. 虫えいは木質化) ; 大島郡瀬戸内町油井岳, 22.X.2022, 幼虫不在(虫えい [長さ/幅 mm : 10.84/8.17] を解剖, 幼虫は見つからず. 虫えいは木質化) ; 奄美市名瀬朝仁, 24.X.2022, 若齢幼虫(虫えい [長さ/幅 mm : 5.23/4.88] を解剖, 若齢幼虫が2頭存在, 虫えいは木質化) .

・徳之島(新分布記録)

天城町西阿木名(図2), 20.X.2022, 若齢幼虫(虫えい [Nos. 1-2, 長さ/幅 mm : No.1, 6.86/10.12; No.2, 13.18/13.10] を解剖, No.1からは幼虫見つからず, No.2には若齢幼虫が11頭存在, No.1は木質化, No.2は木質化しておらず) .



図1. 奄美大島で採集されたスダジイハナエダフクレフシ.



図2. 徳之島で採集されたスダジイハナエダフクレフシ(矢印).

本報告により、奄美大島と徳之島からスタジイタマバエが初めて記録された。過去の沖縄島での記録を踏まえると、本種が南西諸島に広く生息していることが示唆される。

九州では、スタジイタマバエの幼虫に寄生する外部捕食寄生蜂が確認されており (Tokuda et al., 2019) , 今回の解剖でも奄美大島で外部捕食寄生蜂が確認された。これらの結果は、いずれの島でも本種の捕食寄生蜂がまったく確認されていない伊豆諸島とは対照的である (Tokuda et al., 2022) 。これらの捕食寄生蜂の存在が九州や南西諸島ではスタジイタマバエの密度制御要因として働いており、伊豆諸島のような高密度化が生じない可能性が考えられる。

伊豆諸島では、スタジイタマバエは11月から12月に終齢(3齢)幼虫へと発育する (Tokuda et al., 2022) 。今回、10月に採集した虫えいのほとんどが木質化していたにもかかわらず、虫えい内からは若齢幼虫が確認された。このことから、虫えいの木質化は幼虫の成熟よりも前に生じると考えられる。また、今回の解剖の結果、タマバエの若齢幼虫が含まれていた虫えいから外部捕食寄生蜂が確認された。一般に、タマバエ科に寄生する外部捕食寄生蜂は、寄主幼虫が終齢になった後で寄生する (Yukawa et al., 2021) 。スタジイタマバエにおいて、外部捕食寄生蜂の寄生時期や虫えいの木質化が外部捕食寄生蜂の寄生回避に及ぼす影響などは今後の興味深い研究課題と考えられる。

#### [引用文献]

- Elsayed, A. K., Yukawa, J. & Tokuda, M. (2018) A taxonomic revision and molecular phylogeny of the eastern Palearctic species of the genera *Schizomyia* Kieffer and *Asteralobia* Kovalev (Diptera, Cecidomyiidae, Asphondyliini), with descriptions of five new species of *Schizomyia* from Japan. *ZooKeys*, **808**: 123–160.
- 永井 脛 (2010) 宮崎県の虫えい [III]. 西諸の生物, **3**: 7–38.
- 中琉球どんぐりパンフレット編集委員会 (2022) どんぐりを調べてみよう！—中琉球におけるどんぐりモニタリング調査—. 10 pp. 国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所, つくば.
- 高嶋敦史・久高奈津子・阿部真・安部哲人・小高信彦 (2021) 南西諸島の中琉球における双眼鏡を用いたスタジイ豊凶モニタリング. 九州森林研究, **74**: 69–72.
- 徳田 誠 (2014) 伊豆諸島の虫えい形成タマバエ相. 昆虫と自然, **49**(3): 26–29.
- Tokuda, M. & Kawauchi, K. (2013) Arthropod galls found on Toshima and Shikinejima Islands, the Izu Islands, Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **19**: 261–274.
- 徳田 誠・川内孝太 (2013) 鹿児島県におけるスタジイタマバエの採集記録. *Pulex*, (92): 616–617.
- Tokuda, M., Kawauchi, K., Kikuchi, T. & Iwasaki, Y. (2015) Arthropod galls newly found on the Izu Islands, Tokyo, Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **21**: 363–365.
- Tokuda, M., Kawauchi, K., Matsuda, H., Naito, A., So, Y., Elsayed, A. K., Kikuchi, T. & Kotaka, N. (2022) Hundreds of billions of silent outbreaks: A historic outbreak record of the gall midge *Schizomyia castanopsisae* (Diptera: Cecidomyiidae) on the Izu Islands, Tokyo, Japan, and its potential mechanism. *Entomological Science*, **25**: e12524.
- Tokuda, M., Matsunaga, K., Elsayed, A. K. & Matsuda, H. (2019) New host and distribution records for *Schizomyia castanopsisae* (Diptera: Cecidomyiidae) from Fukuoka, northern Kyushu, Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **25**: 61–62.
- Tokuda, M., Matsuo, K., Kiritani, K. & Yukawa, J. (2013) Insect galls found on Ohshima, Kozushima



- and Niijima Islands, the Izu Islands, Tokyo, Japan. *Makunagi/Acta Dipterologica*, (25): 1–16.
- Tokuda, M., Matsuo, K. & Yukawa, J. (2012) Insect galls found on Miyakejima and Hachijojima, the Izu Islands, Tokyo, Japan. *Esakia*, (52): 59–66.
- 山内政栄・池長裕史・湯川淳一 (1982) 南西諸島から採集されたタマバエのゴール. *SATSUMA*, (31): 1–23.
- 湯川淳一・榊田 長 (1996) 日本原色虫えい図鑑. 826 pp. 全国農村教育協会, 東京.
- Yukawa, J., Matsuo, K. & Fujii, T. (2021) Natural enemies with special reference to parasitic wasps. In Yukawa, J. & Tokuda, M. (eds.) *Biology of Gall Midges – Evolution, Ecology, and Biological Interactions*: 225–251. Springer, Singapore.
- 湯川淳一・尾形之善・鏑木紘一・徳田 誠 (2013) 種子島で採集されたタマバエのゴール. *SATSUMA*, (150): 48–61.

6 4 7 (Phas.:Varia) ヤマトアシナガアリ及びアズマオオズアリの巣から発見された  
ナナフシ卵  
勝部菜摘・久末 遊・西谷光平・橋爪拓斗 (九大院・生資環・昆虫)・  
三田敏治 (九大院・農・昆虫)

アリ類はしばしばナナフシ類の卵を巣へ持ち帰ることが知られている (Compton & Ware, 1991; Hughes & Westoby, 1992; Windsor et al., 1996; Stanton et al., 2015; Yamada et al., 2021; Toyama et al., 2021) . 多くのナナフシ類の卵には蓋帽と呼ばれる附属物が発達しており, これに含まれる脂肪酸が栄養報酬になると考えられている (Stanton et al., 2015) . 筆者らは大分県で 2021 年から 2022 年にかけて行った調査において, アリ類の巣からナナフシ類の卵を得たので報告する.

調査は, 大分県別府市日向自然観察路で石の下に営巣しているアズマオオズアリ *Pheidole fervida* Smith, 1874 とヤマトアシナガアリ *Aphaenogaster japonica* Forel, 1911 を対象に行った. 石を起こして巣内のナナフシ卵の有無を確認し, 目視で見つけられる範囲の卵を回収した. また, その周辺の林床やリター層のアリ類, ナナフシ卵, 寄生蜂を目視や篩い採集で調査した. 2021 年 9 月 19 日及び 25 日の調査では石起こしでアリの巣内を確認し, ナナフシ卵が発見された場合のみ内容を記録した. 2022 年は 5 月 18 日と 19 日, 9 月 20 日と 21 日に調査を実施した. 石起こしで調べたアリの種類と巣の数, またナナフシ卵が見られた場合その内容に加え, 卵以外の植物の種子の有無を記録した. 種子は原型をとどめて種子と認識できるもののみ採集した.

[結果]

2021 年の調査では, ナナフシ卵が確認できなかった巣の数は記録していないため不明だが, 9 月に 6 個のアズマオオズアリの巣, 3 個のヤマトアシナガアリの巣からエダナナフシ *Phraortes elongatus* (Thunberg, 1815), ヤスマツトビナナフシ *Micadina yasumatsui* (Shiraki, 1935), ニホントビナナフシ *Micadina phluctainoides* (Rehn, 1904) の卵が発見された (表 1) . 2022 年の調査では, 5 月に 3 個のアズマオオズアリの巣, 10 個のヤマトアシナガアリの巣を調査したがナナフシ卵は発見されなかった. 一方, 9 月の調査では, アズマオオズアリの巣 4 個とヤマトアシナガアリの巣 27 個の合計 31 個の巣の内, 8 個の巣でエダナナフシ, ヤスマツトビナナフシ, ニホントビナナフシの卵が発見された (表 1) . ナナフシの卵は石の裏にできた巣で見つかった (図 1) .

ナナフシの卵と同時に植物種子が得られる場合があり, 2021 年 9 月 20 日と 25 日にアズ

表 1. アズマオオズアリ *Pheidole fervida*, ヤマトアシナガアリ *Aphaenogaster japonica* の巣内でみられたナナフシ卵の種構成と種子の数.

Ant species	date	No. of phasmid eggs			No. of seeds
		<i>Phraortes elongatus</i>	<i>Micadina phluctainoides</i>	<i>Micadina yasumatsui</i>	
<i>P. fervida</i>	Sep. 19, 2021		6	4	2
<i>P. fervida</i>	Sep. 19, 2021	1			
<i>P. fervida</i>	Sep. 19, 2021	3		3	
<i>P. fervida</i>	Sep. 19, 2021	4			
<i>P. fervida</i>	Sep. 19, 2021	3	3		
<i>P. fervida</i>	Sep. 25, 2021			1	1
<i>P. fervida</i>	Sep. 21, 2022	1			
<i>A. japonica</i>	Sep. 19, 2021		1		
<i>A. japonica</i>	Sep. 19, 2021			1	
<i>A. japonica</i>	Sep. 25, 2021		1	1	
<i>A. japonica</i>	Sep. 20, 2022		2		8
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022		1	1	
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022	2			
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022	2			
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022	1			
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022		2	1	
<i>A. japonica</i>	Sep. 21, 2022			1	

マオオズアリの巣からそれぞれ2個と1個の種子, 2022年9月20日にヤマトアシナガアリの巣から8個の種子が採集された. ハギ属 *Lespedeza* sp.の種子が2つのアズマオオズアリの巣から1個ずつ採集されたが, その他の種子は同定が困難であった. 卵は巣の表面に露出しているものを回収したが, 1例だけ露出している卵の下にも卵が埋まっていたことがあった. 巣の表土の下にはまだ卵が残されていた可能性があるが, 本調査では調べていない. エダナナフシではすべての卵で蓋帽がなくなっていた.

巣の周辺の林床では, 2021年9月19日の調査でニホントビナナフシの卵を運ぶアズマオオズアリ(図2)を1例確認し, リター層からナナフシヤドリバチ *Nipponosega yamanei* Kurzenko & Lelej, 1994 のメスを3個体得た. ナナフシヤドリバチの標本は九州大学農学部昆虫学教室で保管している.

[考察]

Yamada et al. (2021) は, *Acanthomyrmex glabfemorialis* Zhou & Zheng, 1997 の巣より, 傷つけられ蓋帽を失ったナナフシの卵が得られたことを報告している. また, Toyama et al. (2021) はアミメアリ *Pristomyrmex punctatus* (Smith, 1860) がエダナナフシの卵, 特にその蓋帽を巣に持

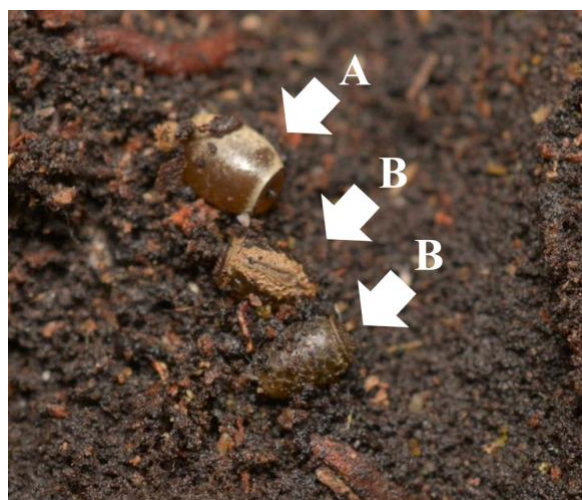


図 1. アズマオオズアリ *Pheidole fervida* の巣内で見つかったエダナナフシ *Phraortes elongatus* (A) とニホントビナナフシ *Micadina phluctainoides* (B) の卵. 2021年9月19日撮影.

ち帰ることを実験的に明らかにしている。筆者らの調査で見出されたナナフシ類の卵でも、Yamada et al. (2021) の観察のように卵の多くは表面が傷つけられており、エダナナフシの蓋帽は全て取り外されていた。蓋帽の発達しない卵も同様に巣に持ち込まれていた(表1)ため、ある程度どの卵もアリを惹きつけていると考えられる。

Readshaw (1965) は様々なアリの巣でナナフシの卵が種子とともにみられると報告しているが、著者らが確認した限り、具体的な記録は Yamada et al. (2021) に加えて本報告で2例目となる。調査地では対象としたアリの巣からナナフシの卵が見つかることは稀ではなかったため、日本国内の他の地域でも広くみられる可能性が高い。また、5月の調査では巣内で卵が見つからなかったことから、9月に見出されたナナフシ卵は当年産卵されたものだと考えられる。今回確認されたアリ類は両種共にフタフシアリ亜科に属する。本調査を含めると、これまで少なくとも4亜科12属のアリでナナフシ類の卵との関わりが報告されており

(Readshaw, 1965; Hughes & Westoby, 1992; Rapp, 1995; Windsor et al., 1996; Stanton et al., 2015; Yamada et al., 2021; Toyama et al., 2021) , 実際に幅広いアリ類が様々なナナフシの卵の二次的分散に関与していると考えられる。

ナナフシの卵とアリや天敵との関わりは興味深い課題である。調査地で確認されたナナフシヤドリバチは、ニホントビナナフシの他複数種のナナフシの卵に寄生する可能性が示唆されている(Mita, 2021)。日本国内では例を知らないが、寄生蜂の他にはげっ歯類や鳥がナナフシの卵の捕食者として知られる(Rapp, 1995)。アリの巣でナナフシが孵化するとアリから襲われるかもしれないが、巣内に放置されたり土に埋められた卵は天敵から逃れることができる(Hughes & Westoby, 1992; Yamada et al., 2021)。また、アリ類はしばしば巣を移動させるため、残された卵はアリとの直接の遭遇を回避できる可能性がある(Hughes & Westoby, 1992; Toyama et al., 2021)。

末筆ながら、本報をまとめるにあたり、種子の同定のアドバイスをご教示いただいた大河原恭祐博士(金沢大学)、採集に協力いただいた青山拓実氏(九州大学)、外村俊輔氏(九州大学)に厚く御礼申し上げます。本研究の一部は旭硝子財団の助成を受けて行われた。

#### [引用文献]

- Compton, S.G. & Ware, A.B. (1991) Ants disperse the elaiosome-bearing eggs of an african stick insect. *Psyche* (Stuttg), **98**: 207–214.
- Hughes, L. & Westoby, M. (1992) Capitula on stick insect eggs and elaiosomes on seeds: convergent adaptations for burial by ants. *Functional Ecology*, **6**: 642–648.
- Mita, T. (2021) Taxonomic study of *Baeosega* and its allies, with description of a new species of *Nipponosega* (Hymenoptera, Chrysididae, Amiseginae). *ZooKeys*, **1041**: 1–25.



図2. 巣外でアズマオオズアリ *Pheidole fervida* がニホントビナナフシ *Micadina phluctainoides* の卵を運搬する様子。2021年9月19日撮影。

- Rapp, G. (1995) Eggs of the stick insect *Graeffea crouanii* Le Guillou (Orthoptera, Phasmatidae). Mortality after exposure to natural enemies and high temperature. *Journal of Applied Entomology*, **119**: 89–91.
- Readshaw, J.L. (1965) A theory of phasmatid outbreak release. *Australian Journal of Zoology*, **13**(3): 475–490.
- Stanton, A.O., Dias, D.A. & O'Hanlon, J.C. (2015) Egg dispersal in the Phasmatodea: convergence in chemical signaling strategies between plants and animals? *Journal of Chemical Ecology*, **41**(8): 689–695.
- Toyama, Y., Kuroki, I., & Nakamura, K. (2021) Dispersal of *Phraortes illepidus* (Phasmida: Phasmatidae) eggs by workers of the queenless ant, *Pristomyrmex punctatus* (Hymenoptera: Formicidae). *Sociobiology*, **68**(4): e7194.
- Windsor, D.M., Trapnell, D.W. & Amat, G. (1996) The egg capitulum of a Neotropical walkingstick, *Calynda bicuspis*, induces aboveground egg dispersal by the ponerine ant, *Ectatomma ruidum*. *Journal of Insect Behavior*, **9**(3): 353–367.
- Yamada, A., Bresseel, J., Chen, Z., Nguyen, A.D. & Eguchi, K. (2021) Deposition of phasmid eggs (Phasmatodea) in the nests of *Acanthomyrmex glabfemoralis* Zhou and Zheng, 1997 (Hymenoptera: Formicidae: Myrmicinae). *Taiwania*, **66**(2): 267–272.

#### 6 4 8 (Phas.: Varia) 九州大学伊都キャンパスでみられるナナフシ類

勝部菜摘・久末 遊 (九大院・生資環・昆虫) ・三田敏治 (九大院・農・昆虫)

筆者らは九州大学伊都キャンパス (福岡県福岡市西区元岡～桑原) でナナフシ類 4 種の分布を確認したため報告する。どの種も 6 月までは若齢で、成虫は 7 月以降に出現した。採集データには、若虫で採集した場合 nymph, その後成虫まで飼育し、性別を確認した個体についてはさらに性別の情報を書き加えた。採集個体の一部は実験に使用したため保管していないが、標本として九州大学農学部昆虫学教室で保管している場合は個別に説明を加えた。報告に先立ち、調査に協力いただき、ナナフシ類を提供いただいた九州大学の荒島弾氏、石東広地氏、牧野迪彦氏、西谷光平氏、野口熨悟氏、野崎翼氏、辻尚道氏、またそれらに加えて貴重な各種情報をご提供いただいた紙谷聡志博士に厚く御礼申し上げる。

#### [採集データ]

ナナフシモドキ *Ramulus mikado* (Rehn, 1904)

1♀, 16. VII. 2021, S. Noguchi leg.; 3♀ (nymphs), ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb., 1784, 7. IV. 2022, N. Katsube leg.; 3♀ (nymphs), ヤマザクラ *Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H. Ohba, 1992, 20–22. IV. 2022, S. Kamitani leg. (1♀教室保管)

トゲナナフシ *Neohirasea japonica* (de Haan, 1842)

1♀ (nymph), 21. V. 2021, T. Nozaki leg.; 1♀ (nymph), 4. VI. 2021, M. Makino leg.; 2♀ (nymphs), 13. VI. 2021, T. Nozaki & N. Tsuji leg.; 1♀, 27. VII. 2021, N. Katsube leg. (教室保管); 5♀, 1. VIII. 2021, N. Katsube leg.; 1♀, 19. VIII. 2021, N. Katsube leg.; 4♀, 29. IX. 2021, N. Katsube leg.; 1♀, 14. X. 2021, H. Arashima leg.; 7♀ (nymphs), 27. VI. 2022, N. Katsube leg.; 1♀, 3. VIII. 2022, N. Katsube & T. Mita leg.; 1♀, 8. IX. 2022, N. Katsube & T. Mita leg.; 1♀, 11. X. 2022, N. Katsube & T. Mita leg.; 1♀, 16. XI. 2022, K. Nishiya leg.; 1♀, 1. XII. 2022, N. Katsube leg. (教室保管)

キャンパス内の林床で夜間に多くみられた。

エダナナフシ *Phraortes elongatus* (Thunberg, 1815)

1♂, ヤマザクラ, 14. VIII. 2020, Y. Hisasue leg. (教室保管) ; 1♀, 21. IX. 2020, Y. Hisasue leg. (教室保管) ; 1ex. (nymph), 15. IV. 2021, N. Katsube leg.; 3exs. (nymphs), 28. V. 2021, N. Katsube leg.; 1♀, 16. VII. 2021, N. Katsube leg.; 1♂2♀ (nymphs), 22. IV. 2022, スウィーピング, S. Kamitani leg. (教室保管) ; 2ex. (nymphs), ヤマザクラ, 16. VI. 2022, N. Katsube leg.; 2♂3♀ (nymphs), ノイバラ, 27. VI. 2022, N. Katsube & T. Mita leg. (1♂教室保管) ; 1♂1♀ (nymphs), 27. VI. 2022, N. Katsube leg.; 1♀, 16. VII. 2022, N. Katsube leg.

本種は1994年7月の調査でも伊都キャンパスで確認されている(野村・紙谷, 2013)。

タイワントビナナフシ *Sipylodea sipylus* (Westwood, 1859)

1♀, 24. X. 2020, Y. Hisasue leg. (教室保管) ; 1♀, 12. XI. 2020, Y. Hisasue leg. (教室保管) ; 1♀ (nymph), 16. VII. 2021, K. Ishito leg.; 1♀ (nymph), 30. VII. 2021, N. Katsube leg.; 1♀ (nymph), 22. IV. 2021, S. Kamitani leg.

[引用文献]

野村周平・紙谷聡志(2013) 1994-1995年に九州大学伊都キャンパス建設予定地において確認された昆虫目録. 比較社会文化, (19): 85-112.

研究会事務所	〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地 九州大学大学院農学研究院 昆虫学教室
会長	広渡俊哉
編集	紙谷聡志・屋宜禎央 (092-802-4583, yagi.sadahisa@agr.kyushu-u.ac.jp)
2022年12月31日 発行	編集兼発行者 九州・沖縄昆虫研究会